
魔法少女リリカルなのはStrikers-仮面の復讐者-(復刻版)

DARK 0(元 レア)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers - 仮面の復讐者 - (復刻版)

【Nコード】

N09740

【作者名】

DARK 0 (元 レア)

【あらすじ】

ある日両親を殺された男は復讐を誓う。復讐相手を見つけ、遂にその復讐に終止符を打とうとした直後……

携帯の機種変に伴い、前のIDやパスワードを忘れ、一からやり直す事となってしまう。中身は前回とほとんど一緒です。自分の失態で前の作品を気にかけてくださった皆様には大変申し訳なく

思います。

非才の身ですが、どうぞよろしくお願いします。

追憶

俺は望んだ訳でもなく生まれてきた。

望みなんてものは生まれてから出来るものだし、望みを持つということはこの世に生まれた証。なら、この言葉には何の意味もないのだろう。

それでもそんな意味のない言葉を並べて、自分を被害者として祭り上げてもしなければ、俺は今まで生きてこれなかったかもしれない。

きっかけは些細なことだった。

俺の生まれた家族はある一点を除けば何の変哲もない家族。――いや、今考えても本当にいい家族だったと思う。

家はそれなりに裕福。父は下手したら俺より子供っぽくて俺より馬鹿だったけれど、いつも俺と遊んでくれていつも俺を見ていてくれた。

母は美人で優しくて温かくて、たまに怒らせた時は無言の笑みで迫ってくる死刑執行人みたいだったが、いつもわらっていていつも叱ってくれた。

きっかけは些細なことだった。

俺が中学三年生だったころ、いつも通りに学校に行っていていつも通りに部活動をして帰ってきた。夕陽が綺麗に映えていた日だった。

家に明かりが点いていない事に気づいた俺は、ああ、また二人で何処かに出かけてるのか、と信じて疑わなかった。

けれども玄関の戸を開け、中に入った瞬間に妙な寒気を覚えた。いつの間にやら外は急激に暗くなり始め、冷たい空気が更に冷やされるように激しい夕立の音が聞こえてくる。

根拠も確信もない。漠然と温かいはずの我が家が、まるで廃れた廃墟のように感じた。いつものように綺麗に掃き掃除された玄関が嫌に不気味に見える。

もちろん何時までもそうしている訳にもいかず、恐る恐る靴を脱ぎ、暗い廊下の電気を点けた。直後、嫌な気分は消え失せる。

電気の点いた廊下はいつもの風景で、いつものように温かい。

なんだ……結局は俺がまだ小さな子供みたいに臆病なだけじゃないか。夕立や誰もいない状況が、昨日家族三人で見たホラー映画に少し似ていたから緊張してしまったのだ。

そう納得して、二人が帰ってくるまでカバンに入っている映画のDVDでも見ようかとリビングに足を踏み入れた瞬間。

生暖かいナニカが俺の足を濡らした。

同時に胸に響く轟音が轟き、真っ暗なリビングが真っ白な光で照らされた。

雷が轟く刹那。目にしたのは愛すべき二人の姿。

そんな二人が赤く紅く染まり、手足も胴も、何もかもがバラバラになって横たわっていた。

それは疑いようがない。十人が見て、内十人が同じ答えを出すであらうー

死体――だった。

涙は出なかった。俺は硬直した身体を無理に動かし、ふらふらした足取りで家の電話に向かった。

途中、ナニカが足に当たった。それでも、目は伏せなかった。直視すればもう全てが駄目になる、と当時の俺は訳が分からないなりに理解していたんだと思う。結局、それは遅いか早いかの違いなのだろうけど。

連絡して直ぐに警察と救急隊員が来たが、案の定両親は手遅れ――即死だった。

その事実には俺は心の限り叫んだ。

どんな事を叫んでいたかは覚えていない。ただ、余りの錯乱ぶりに大の大人二三人に押さえ込まれたのは覚えている。

そうして、俺の幸せな家族生活は前触れもなく消失した。

きっかけは些細なことだった。

それから数日、警察に最後の事情聴取を受け、頭の整理もつき始めた頃。一人の女性が唐突に俺を預かると訪ねてきた。

全く知らない人だった。その人は両親の知り合いらしく、俺は流されながらも結局その人に引き取られていった。

そーーこれは些細な物語。

ただ、俺があの一二人の息子だったと言っただけがきっかけのー

本当に些細な物語である。

復讐（前書き）

しばらくは復旧作業になります。

出来る限りの早さで進めていきますのでよろしくお願い致します。

復讐

オブジェ・フラジイル。コードネーム“壊れ物”。奴はそう呼ばれていた。

奴は数年前まである組織の幹部であったが、基本的に秘匿とされている魔術に手を染め、幸運にも適正し、その組織を脱退した。

この世界には驚くべき事に魔術なんて言うオカルト現象が存在していました、なんて言うファンタジックな事実を知ったのはあの女に拾われてから直ぐの事だった。

魔術。それは人の身でありながら、その身に内包される人を越えた力。

それを扱う魔術師という肩書きは誉れ高くも何の意味もない称号だとあの女は常にぼやいていた。

魔術は有体に言えば、小説や漫画なんかで見られる炎を操って敵を吹っ飛ばすとか、架空の生物を呼び出して使役するとかそんな類の物だと理解して貰って構わないだろう。

俺は実際にそんな力の持ち主と一戦交えた事がある。あれは本当、

つくづく反則だと今でも思う。

まあそんな魔術だが、定義としては人知を越える力を持つという事である為に、その範囲は意外に広い物である。

例えば一つの武道を極め、達人と呼ばれる域にまで達した者。これも立派な魔術師である。そもそも達人等と呼ばれる人々は、その武道を嗜む者にこれ以上の高みはない。これこそがこの道の頂点だと言わしめる程の力を持つ者。

他者がこの者には適わないと思った時点で、その者は既に同じ人間として見られていないのだ。つまり、その時点で人知を越えた存在へと昇華するのである。

長々と説明したが、要はこの世界の裏にはそういう世界もあり、もちろんそれを管理する組織も悪用する組織もあり、更にそんな得体の知れない力を壊れ物が持っていると言うことである。

奴の事は多くは語りたくない。名前を聞いただけでどうにかになってしまいそうなのに、これ以上奴の詳細を俺の口から吐き出す等軽く発狂しそうだ。

いやあ、色々あったけど漸く君はその重荷を下ろせる訳だ。良かった良かった、君は復讐を遂げられ、私はこれ以上ない破格の報酬が貰える。いやあ、こんな金ヅル逃すの勿体ないなあ……どう？お姉さんの身体好きにしていいいからこれからも一緒にいてくんない？

「仮にとは言え養子縁組した息子に向かって何て台詞吐いてんだよ、あんたは」

俺はうんざりするほど広い荒野で、聞き慣れた女はかの声にこれまたうんざりした声色で呟いた。

いやさ、養子縁組とは言っても形だけだし、何よりあの糞坊主がここまで良い男になるとは思ってなかったからさ。つー訳で結構本気だったりするかもよ？ ほら、えーと……棚から金持ちだっけ？

「そんな棚があつたら全世界の金持ちの身が保たねえよ」

じゃあ、億持ち

「金額の問題じゃねえよ！ しかも、何さらつと選考基準厳しくしてんの！」

ほら、私ってプライドの高い女だからそれ相応の経済力が無いと

……

「やかましいわ！」

一体何度こんなやり取りをして来たのだろう。耳に取り付けた最新の通信機器から聞こえるアイツの声は、これからやる事を考えると場違いどころか次元違いのちゃらんぽらん具合である。

まあアイツに空気を読ませる等、吸血鬼がニンニクを食べるが如き蛮行である。それこそ命を投げ捨てる程の犠牲を払わねば成し得ない奇跡の御業だろう。とんでもない魔術だ。

まあ、何にせよ……これで君も悪戯に何かを求める必要なんてなくなる訳だ。ただ、居場所を失った力がどうなるかは目に見えてるけどね

俺はその言葉には答えなかった。正確には答えようとすら思わなかった。その原因は不意に感じた、しかし懐かしく慣れきった寒気のせい。

あの日と同じ。自分が臆病に思えて仕方がないあの恐怖の寒気。

あー、やつこさんいらっしやったか……なら、君はもうスイッチ入っちゃってるんだよね。仕方ないなあ……本当に世話のかかる糞ガキだ

アイツの声はただの音声として、まるでBGMのように頭を通り抜けていく。その間に奴の影が見えた。奴の長い銀髪が風に揺れ、柳のように騒めいている。

じゃあ、まあ……頑張つてね。一応死なない事を祈つてあげるわ

ふとアイツがそんな事を言ったのに驚いてしまう。少し日常の顔に戻った俺の顔は間違いなく驚愕の色に染まっているに違いない。

「なに？ 心配してくれてんの？」

バ、バカ！ あんたの為なんかじゃないわよ。ただあんたがいなくなるとお金が……そう！ 新しく金ヅルを探すのが面倒くさいだけなんだからね！

「慣れない事するとシワが目立つようになるぞ」

あつはっはっ、絶対生きて帰ってこい。私が殺してやるから

不覚にも笑ってしまった。いや、言ってる事は物騒この上ないがアイツはこうでなくちゃ嘘だ。

「ああ……ちゃんとぶっ殺されに行くから待ってる」

……やば、やっぱりあんたいい男になったわ

その言葉を最後にぶつんと通信機器の音が途絶えた。アイツ……配線まるごと引き抜きやがったな。

さて、楽しいお喋りは終わった。ここからは泣く子も黙るえげつない寸劇^{ショー}の始まりだ。

寒気は止まらない。手足はかじかみ、身体は芯から冷えきっていく。

しかし、それは結局の所気のせいだ。氷や水を媒介にする魔術を使う奴ならまだしも奴はそんな奴じゃない。

影が姿を現す。長い銀髪。シミ一つない真っ白なコート。凍てついた金色の瞳。間違う事はない奴だ。

俺の両親を殺した白き壊れ物。オブジェ・フラジール。奴がそこに立っていた。

「よお」

俺の声に奴の眉が若干揺れた。そして、奴は口を開く。

「ああ、久しぶりだ。直に会うのは何年ぶりだい。あれから随分経った気がするが……」

「たった三年だ。それよりさ……」

奴は笑みを浮かべ、こちらを見ている。奴は俺と話したいみたいだが、俺は生憎そうじゃない。冗談じゃない、こんな奴と話なんて虫酸が走る。

「会話は……必要か？」

だから、爆ぜた。大地を蹴り潰し、何の意味もなく、ただ愚直に奴

に接近した。

戦闘の合図は正にこれだった。奴は自分の腰に手を回し、何かを引き抜くように両手を俺の頭蓋目がけて振りぬく。

俺はそんな奴の手を見ながら、懷から自分の獲物を取り出し、奴の手の中の何かに思い切りぶつけた。

ガキンと鈍い音が鳴り響く。奴の手には何も見えない。ただそこには剣のような何かが存在した。少なくとも金属の棒であるのは間違いない。

そして、対する俺の手には刃渡り三十センチにも及ばない短刀。それを逆手に持ち、奴の手にある何かを受け止めている。

「くくく、はははははははは！ いい！ 最高だ！ 君はやっぱりそうじゃなくては。そうじゃなくてはあの二人の子とは呼べない！」

「喋るな！ 吐き気がするだろうが！」

俺はそのまま強引に奴の手にある獲物を振り払い、短刀を握り変え心臓目がけて突き刺しにかかる。奴はそれを半身になって躲し、空になった右の拳を俺の顎に打ち付けた。

咄嗟の事に対応できなかった俺は顎を守る為に左腕を顎の前へ。

瞬間、まるでダンプカーが衝突したような衝撃が腕を貫く。

「　　っぐ！」

呻き声を上げ、後ろに吹き飛ばされながらも、反り返る身体に抗う事なく足を伸ばす。

「ぐっ！　は　　っあ……」

伸ばした足は見事に奴の顎を捉え、十分な威力で奴の頭部をかち上げる。奴は自分自身の攻撃がそのまま返ってきたような物だ。俺はガードしながらも奴に超ヘビー級のパンチを頭部周辺に食らった。それはもちろん耐えきれるような物でなく、俺はバク転するように後ろに吹き飛ばされた。

ただ、そのままじゃ終わらない。だから、俺はその威力を逆を利用してやった。吹き飛びつつある身体を目一杯伸ばし、奴の顔に足を届かせ、かち上げた。

やった事はラッキーで当たったサマーソルトキックみたいな物だ。しかし、この戦いに偶然など存在しない。奴に偶然なんて言葉は望

めない。

「ちっ……たつた三丁四合でもう左腕が逝ったか。本当に……」

そう言つて、短刀を口に加え、顎を押さえ呻く奴に空になった右手を向ける。

「でたらめだな！ 俺もお前も！」

そうして俺は自分の身体を巡っている力を呼び起こす。血潮に混じり、循環し続けるそれらを独自に張り巡らされた回路に通し、右手に集結させる。

「Regen」

出てくる言葉は魔術の具現。自らの内包する力を放つ為の黒き撃鉄。

「van Zwart（黒の雨）！！」

放たれるは無数の黒。何の形も保たないただの黒い球体を奴に向けて豪雨の如く叩きつける。

「カカカカカカカカカカカカカカカカカカ！」

奴はその雨の中、耳に障る狂った笑い声を上げた。その笑いに呼応させるように目に見えない剣を千切れんばかりに振り回す。

分かっていた事だ。奴にあんな物は通用しない。

予想していたとは言え、その黒雨は若干へこむぐらいに、情けないぐらいにあっさりと奴の剣で虫を払うが如く弾かれる。

しかし、それも分かっていた事だ。黒雨を放ち続けながらも一つの魔術の準備を始める。

奴とはできれば長時間顔を合わせたくはない。奴は知らないが少なくとも俺はそうだ。憎むべき相手をいたぶるなんて暇があれば、俺は直ぐ様殺す。

戦いの最中ならいざ知らず、俺は元来は普通の人間性なのだ。人をなぶって喜ぶような外道では断じてない。

会話も必要ない。長い時間も必要ない。

ただ、俺は早くこの息苦しさから解放されたい。ただ、あの日から頭にこびりついて離れない暗くて、紅くて、白い光景を消してしまいたい。

ただ　大好きだった両親を殺した奴を早く殺したい。

だから　。

短刀を吐き捨て、黒雨を消した。それと同時に全速力で奴との距離を詰めにかかる。

さつさと　。

奴もほとんど同じタイミングで俺へと肉迫する。数秒も経たなかった。数秒も経たず俺達の間は手を伸ばせば届く距離まで縮まった。

それぞれ必殺の一撃を振りかぶる。

奴は不可視の剣を。俺は真っ黒にそまつた自身の右腕を。

そして

「ぶつ潰れるおおおお！ オブジエエエエエエエエエエエ
ー！」

「やってみる！ ラストアンサアアアアアアアアアアア！」

空気が震えた。互いの獲物と手のひらが見えない力で拮抗し、ほとばしるエネルギーがさながら台風のように爆散し続ける。

「アアアアアアアアアアアアアア！」

「カカカカカカカカカカカカカカカカカ！」

狂ったように叫びながらこの身に残る力を総動員し、黒く染まった腕で押し続けた。

身体中の筋肉が限界だと軋む。心臓が胸を突き破るぐらいに大きく

激しく脈動する。

口から際限なく血の味が込み上げる。思考は一切の行動を破棄し、常に頭は真っ白。

しかしその中で視界だけは、視界だけは奴の全てを認識していた。あの狂ったような笑みも、凍てついた瞳も、憎らしいその存在を全て、毛髪の一本に至るまでが強引に目に焼き付く。

「ゼアアアアアアアアアアアアアア！」

「ガアアアアアアアアアアアアアア！」

奴の顔を見て、更にギアを上げた。沸き立つ血液が皮を裂き、右腕から咲く花のように吹き出す。それでも、上げる。まだ上げる。上げて上げて上げ続ける。

何時しか真っ白だった視界は黒くなっていた。俺の手のひらと奴の剣の間にブラックホールのような懇々とした闇が渦巻いている。その渦はどんどん大きくなり、どんどん深くなっていく。

すると、視界がグラグラと縦に揺れだした。地面が低い唸り声を上げ、俺達に止めると警告する。

止まらない。止まってやらない。俺は自分の為に生きてきた。だから、この視界が奴を捉えなくなるまで自己中にはた迷惑な道を進み続ける。

そうして何度目か分からないギアを上げた。すると、突然俺達の間
に渦巻く闇が口を開いた。

「　　っ！」

身の危険を感じ、奴から距離を取ろうと後ろに飛ぶ。しかし、それは叶わなかった。闇が口を開いた瞬間、強力な引力が俺の身体を襲った。

掃除機に吸われるゴミのような気分だった。抵抗する手段を思いついた時には、もう身体の半分以上が闇に飲まれている。

直感したのはもう何をしても無駄だという事。ズブズブと身体が包まれながらも既に抵抗する気は失せてしまった。

いつの間にやら奴の姿が視界から消えていた。おそらく奴は一足先にこの闇に飲まれたのだろっ。なら構わない。奴とはこの中で殺し合い（続き）が出来る。

そう考えた瞬間に、急に眠気を覚える。ああ、いいさ。少し休憩だ。
目が覚めたらまた頑張ろう。

そうして俺は瞼を落とす。そして、落ちていく微睡みの中で

愛すべき両親と馬鹿なアイツの事を思い浮かべていた。

始まり

「次元反応？」

「はい、先ほど首都クラナガン方面で観測されたのですが、観測されてから数秒後には直ぐにロストしてしまいました……」

とある陸士部隊の隊舎。そこで唐突にそんな報告が私の元に飛んできた。

それは私が先日この区域で起こった事件の調査の為に、この隊舎で情報を収集していた矢先の出来事だった。

「詳細な位置を教えてくださいませんか？ 私が直接出向いて確認して来ます。もし、次元犯罪者なら私の専門ですし、次元漂流者なら保護も出来ますから」

「い、いえ。わざわざ執務官自身が確認なんてご迷惑を押しつける訳には……」

私の申し出に目の前の局員は慌てたように取り繕う。別に迷惑でもないんだけど。

「……構いませんよ。事件の調査に協力頂いてるんですからせめてこれぐらいは」

そう言うと、目の前の局員は申し訳なさそうな顔をしながらも了承してくれた。私は次元反応があった場所のデータを受け取り、隊舎の外へ出る。

データによると、反応があった場所はここからそう遠くない。車を走らせれば五分かそこらで着くだろう。

駐車場に止めてある愛車のエンジンをかけ、不意に夜空を見上げる。空は澄み渡っていて星が綺麗に瞬いている。

「綺麗だな……」

思わず呟いて少しの間その夜空に見惚れてしまう。こんな綺麗な星空の元でまさかあんな出会いがあるなんて、私はこの時綺麗すぎる星空に感心して、感じていたかもしれない予感を逃していたのかも知れない。

「えと……この辺りのはずなんだけど」

車を走らせる事数分。目的地周辺についた私は端末を片手に辺りを見回した。

私が今いるのは首都クラナガンにある、とある繁華街　の路地裏。ここミッドチルダは魔法の発祥地と言う事から他の世界より幾分発達しているとは言え、建設的な技術はさほど他世界と変わらない。

だから、自然とこんな場所も出来てしまう。その事自体は仕方のないことだけれど、やっぱり一人の女性として路地裏なんてものにはあまりいいイメージがなかったりする。

「管理局の者です。どなたかいらっしゃいませんか？」

そんな嫌なイメージを追い払う意味も込めて、誰もいない路地で声を上げる。同時に右のポケットに入っている私のインテリジェントデバイス　バルディッシュを　取り出す。

「バルディッシュ。もう一度データを見せてくれる？」

Y e s , s i r

バルディッシュは何時ものように返事をして、隊舎で受け取ったデータを表示する。反応があったのはつい三十分前。次元反応と言っても規模としてはとても小さく、その発生時間も数十秒。

しかし、それでも次元反応が警戒すべき物である事に変わりはない。幾ら小さいからと言って野放しにする訳にはいかない。わざわざ私が来たのはそういう危険性において、陸士部隊では対処に限界があるだろうと思いつたのが理由の一つにあつたりする。

それに今日は、不運にも局員の休暇が重なり実際に人手が足りなかったのだ。いくら上司とはいえ、あの隊舎の局員達は猫の手も借りたい状況だったに違いない。

周りを警戒しながら路地裏を進んでいく。両側が建物で挟まれているからか、普段は気にもしない自分の足音が嫌に耳に残る。

言い様のない不気味さから、人知れず右手にあるバルディッシュを強く握り締めて しまう。

A r e y o u a l l r i g h t ? S i r ?

「うん、ごめんねバルディッシュ。大丈夫だよ」

バルディッシュにまで気を使わせてしまう。本当に情けない。しっかりしなければ……

心の中でそう呟いて、私はさっきより少し力強い歩調で歩き始める。路地裏にある空調機器やごみ箱の間を丹念に調べ、異常がないか不審物はないかを確認していく。

路地を道なりに右に折れる。ここに何もなければ異常がないと報告しよう。そう思った矢先だった。

「……あれは？」

不意にごみ箱とごみ箱の間に何かが倒れていたのが目に入った。それが人だと言う事に気付いたのは、視認してから直ぐの事。

急いでその場まで走り寄り、倒れている人物を正面から確認する。

「……っっ！」

そうして思わず息を呑み、その場に立ち尽くしてしまう。

倒れていた人は私とそんなに年の変わらなさそうな男の人。それだけならまだ良かった。

息を呑んだ原因は彼の身体にあつた数々の異常。

羽織っている黒いロングコートはズタズタに引き裂かれ、既にロングとは言えない長さに。

頭からは血を流し、左腕はあらゆる方向に曲がり、更には右腕全体からまるで中から腕が裂けたように無数の切り傷から血がとめどなく溢れていた。

直ぐにバルディッシュの通信機能を使い、陸士隊舎に報告と緊急医療班を手配させる。

手配が終わった後、応急措置の為に脈を測る。

(……………生きてる)

そうして純粹に彼が生きている事に驚いた。こんな怪我はかなりの

重症だ。それでもこの人は生きている。

そんな驚きがあったからか、落ち着いて彼を観察する余裕が出来る。

黒い髪に全身真っ黒な服装。まるでクロノのようだと心ながら思う。

静かに眠るその顔は、静観で落ち着いた雰囲気ながらも何処か触れば壊れそうな儚さを持っていた。

そして

「……………涙？」

彼の頬には一筋の涙が流れていた。それがどんな感情から来る物なのかは分からない。

けれど……………

「大丈夫。……………大丈夫だから」

自然と彼の身体を抱き締める。冷たく冷えたその身体はさながら氷のようだ。

それでも、手を離さない。そうせずにはいられなかった。彼の涙がどんな物であるにせよ漠然と思ったのだ。

これは昔の私だと。

自分がどんな存在か知らされて、空っぽになっていた当時の私自身なのだと。

私は医療班が来るまで彼を抱き締め続けた。壊れないように、壊してしまわないように……

それが私 フェイト・T・ハラウンと彼との初めての出会いでした。

出会い

あれから十日が経った。医療班の迅速な行動と、発見が早期だったのが功をそうしてあの人は一命を取り留めたらしい。

らしい　という伝聞なのは言葉の通り直接確認したのではなく、人づてに聞いたから。

あの後、私は彼が見つかった事で更に何かが起こる可能性。または彼のような次元漂流者が見つかる可能性を考え、増援を要請しその部隊の指揮を取りつつ私自身も動いていたので、彼の安否も身元確認も満足に出来なかったのだ。

その件が一段落した後も、私が元々受け持っていた事件の調査報告書や解決した後の法的措置などいつも以上にハードな十日間が待っていた。

そして、漸く余裕が出来た今日。

「ねえ、フエイトちゃん。その人って聖王病院に入院してるの？」

「うん。元々首都の中央病院だったんだけど、かなりの重症だったから設備の整ったここに運ばれたんだって」

私は大切な友達。高町なのはと一緒にここ聖王病院にいます。

高町なのは　私を救ってくれたかけがえない友人。管理局内でも指折りの戦技教導官にして、“エースオブエース”の称号を持つ空戦魔導士。

なのはがいなければ、私は今ごろこうしていない。管理局で働く事はもちろん、満足に生きているかどうかさえ疑問だ。

それほどなのはは私にとってかけがえない存在。

「フエイトちゃんにもやつと春が来たね」

「な、なのは！　別にそんなのじゃ……」

「でも、顔真つ赤だよ」

「そんな事言われたら誰でもこっとなるよ！」

私のそんな反応になのはは楽しそうに笑っている。完全にかかわ

れてる……私。

「そ、それに！ これは一応仕事なんだよ。管理局としては次元漂流者を放っておく訳にはいかないし……」

「分かってる分かってる。もう、フェイトちゃんは真面目さんだなあ」

リラックスリラックス、となのはは私の肩をポンポンと叩いて笑いかけてくる。

なのはがこういう顔を見ると、怒りたくても怒れなくなる。案外なのははその辺りを長年の付き添いで分かってきてるのかもしれない。何か対策考えよっかな……

でも、そんな時間も悪くない。なのはとはさすがに四六時中いる訳にもいかない。

だから、こんな何でもない時間がものすごく大切に思えてくる。

正直を言うと今日なのはを呼んだのは、万が一の時に頼れる人がいると心強いと思ったのとは別に単純になのはと話をしたかったのもちよっぴり理由に入っている。

まあ色々とあるけれど、一つだけはっきりした事は私はやっぱり幸せ者だと言つ事。こんな幸せがずっと続くように先ずは目の前の事を片付けよう。いや、そんな事を言ったら今から会つ彼に失礼だけれど……

あらかじめ聞いていた病室の番号を看護師の方に聞き、部屋に向かう。

すると、後ろからバタバタと幾つもの足音が聞こえ、聞こえたかと思えば、何人もの子供の集団が私達の隣を走り抜けていく。

「元氣だね」

「うん」

私の呟きになのはが微笑みながら答える。

子供達は笑いながら皆そろって一つの病室に駆け込んでいく。

「あれ？」

「ん？ とうしたの、フエイトちゃん」

思わず私が上げた声になのはが首をかしげる。

「えと……あの病室。私達が今から行く予定の所なんだけど」

そんな事を言いつつも、私達は病室の前にたどり着く。そして、病室のドアを開けようとした瞬間

「お前ら……いい加減にしろおおおお！」

一人の男の声が聞こえてきた。それも割と大音量で……

（なんだろうね？）

（うん）

私達は病室の前で顔を見合わせ念話でそうやり取りする。

「お前ら、マジでいい加減にしるよ！　ここはお前らみたいなガキがたむろする所じゃねえんだよ。大人の世界だ大人の」

「俺はもう大人だぞ」

「私も」

「ジュース片手にクッキー頬張ってる奴を大人とは呼ばん。コーヒーもまだ飲めんお前らは子供で十分だ！」

「あんな苦いの飲める方がおかしいぜ」

「あの苦みの深さを知らんとは……やはりお前らはガキだな。いいさ。コーヒーが飲めない。けれど、大人を名乗りたいお前達はチョコチップクッキーのチョコチップの若干の苦さを『あれ？　これ大人の味じゃね？』とか勘違いしながら貪るように食らうがいいわ！　食らって食らって、お父さんの稼いだ給料も容赦なく貪るがいいわ！　つか、例えだから！　例えだから本当にチョコチップクッキーを取り出して貪るんじゃないやねえ！！　そして、俺の分もあるなら頂戴！　ギブミー、ギブミーチョコレートオオ！！」

(……ねえ、フェイトちゃん。言ってる事分かる?)

(ごめん、なのは。分かりたくない)

だんだんとこの病室に入るのが怖くなってきた。言葉を聞いているだけでも、何だか部屋の中がすごい事になっているのが目に浮かぶ。

けれど、ここで引き返すのも忍びない。とても恐ろしくはあるが…

意を決して扉に手をかける。

「かくなる上は……」

扉の向こう側から何か男の人が言っているが気にしない。私は思い切って病室のドアを開ける。

「布団バスターじゃああああ!!」

そして、開けた瞬間に目の前に飛び込んで来たのは……人の頭サイ
ズに丸められた布団の塊だった。

「あ」

「あ」

当然、予想も出来ない攻撃に反応出来るはずもなく……それは勢い
とは裏腹にポスリと弱々しい音を立てて私の顔に直撃した。

「本当にすいませんでした」

ただ今の状況。皆さんお分かり頂けるだろうか。

俺は病室らしき場所のベッドの上で見知らぬ女性二人に土下座して
いた。

色々とその前に思う所はあるが、今はこの女性二人に謝るのが優先事項であり、最重要課題である。それ故に他の事は取り敢えず心の隅に置いて頂きたい。

「すみません。ほんととすいませんでした。目が覚めたら見知らぬ所だし、地名聞いても聞いた事のない場所だし、周りの人とは会話が噛み合わないし、挙げ句の果てに病室が子供達の溜まり場になってしまった事でもう自暴自棄になってテンションが上がってしまった……何時もはこんなじゃないんです。俺は基本的にツツコミ要員なんで」

「えと……取り敢えず何も見なかった方向で処理していいかな」

「はい……そうして頂けると大分ありがたいです」

栗色の髪をした女性の苦笑混じりの言葉に、かなり救われた気持ちになりつつ、ベッドに擦り付けていた顔をゆっくりと上げる。

「じ、じゃあ……自己紹介からかな？ 私は時空管理局執務官フェイト・T・ハラオウンです」

「同じく時空管理局所属の魔導士高町なのはです。よろしくね」

はあ…… 栗色の髪の女性高町なのは。金髪の女性フェイト・Ｔ・ハラオウンと軽く握手を交わす。

正直な所、俺には今の状況が何一つ分からない。俺が目を覚めたのはつい二日前。医師から説明を受けたが俺は一週間近く昏睡状態だったそうだ。

まあ、そこまでは百歩譲って許容しよう。思い出したくもないが遙か昔に目覚めたら年数跨いでいたなんて経験がある。魔術絡みであるのは言うまでもない。

そうだとしてもだ。全く知らない場所にいるなんて経験は、あの日を境に常識はずれの体験を続けてきた中でも初めての出来事である。

今いる場所を知らないとかそんな単位規模の話ではない。世界単位で知らないのだ。

阿呆らしい言い草だと笑われるかもしれないが、実際にそうなのだから仕方がない。

証拠として俺はこの世界のどんな地名も、有名人も、歴史も、極めつけにはこの世界の言語が読めないのだ。

それはただ単に俺がその情報だけを実に都合良く忘れているのかもしれない。

もしかしたら、この世界を知っていたのに何かの衝撃で記憶喪失にでもなったのかもしれない。

しかし、そんな可能性は恐らくゼロだろう。文字通り起こり得ない事象。確率。

何故なら、俺は覚えているから。

精神が身体が血潮が脳髓が臓腑が。俺を形作る全ての要因が覚えている。

奴への渴望を、奴への憎しみを、奴への復讐の怨念を、奴と出会い殺し合ったこの手に残る感觸を。

それだけで十分だ。それだけで俺は俺で、今まで存在し続けてきた俺なのだと確信が持てる。

論点がずれたが客観的に見ても、俺は意識を失う前の俺と同一存在である事は確かだろう。

ならば、そんな事柄も十分証拠足りえる。

そして、最初の問題に戻るのだ。俺は一体どうやって、どういう経緯があつてこんな所にいるのか。更に、どうしてこんな面識のない美がつく女性二人が俺の隣にいるのか。

……さっぱりである。

「あゝ、俺達って面識ありましたっけ？」

「会って話すのは初めてだね。私は一方的に君を見た経験はあるけれど……」

「私に至っては全部初めてかな。今日の朝まで知らなかったし」

ハラオウンとか言う女性に続き、高町という女性が続く。

「だよな。だったら、何で俺は君達みたいな美人にお見舞いに来てもらうような素敵イベントに遭遇しているんだろうか」

言って考える。どうにも突拍子がなく理解が回らない。ここにたどり着くまでの原因は見当がつく、しかし偶然にもこのベッドの上に現れたなんて言うご都合主義万歳な展開はないだろう。

そうだとしたら、何処かに意識を失って倒れていたのを、誰かにここまで運んで来てもらったと考えるのが妥当か……

前言撤回。それなら十分ご都合主義万歳である。

まあ彼女達はここにいる以上、俺と何らかの繋がりがあるのだろう。だったら、彼女達に聞いた方が速度的にも効率的にも良いに決まっている。

「あの、俺ってさ……」

さっそく実行に移そうと彼女達に視線を向けると、二人は少々頬を赤く染めて照れるように俯いている。

ああ、純粹だな。と、何となく二人の様子の原因に検討を立てながら、心中で呟いた。

「お二方。美人とか綺麗だとか言われ慣れてないのか？」

「え……まあ、その……」

「余りに自然に言われたから……ちょっと面食らっちゃって」

にやははと、高町が照れながらも人懐っこく笑って見せる。いや、まあ予想はついていた。俺はここで『顔が赤いけどどうかしたか？』みたいな定番の台詞を吐くような鈍感ではない。

他人の心情が読めなければ色々と危険な生活を送っていた身の上としては、他人の心情に鈍感など言うのは致命的なのだ。

使える物は使う。理解出来る事は最大限に理解する。人の心情に気付けない馬鹿が恋愛をするな。

アイツから貰った数少ない教訓の一つだ。まあ、後半の恋愛云々は全く持って役に立たないが、前半の二つは中々どうして……あの女^{ばか}にしては珍^{めづ}しい言葉である。

因みに俺が女性に対して綺麗だの美人だのさらっと言えるようになったのは……言わずもがなアイツの全くありがたくもない教育のおかげである。

「すいません。あるバカに仕込まれてから、そういう褒め言葉を言うのに抵抗がなくなつて……」

「い、いえ。こちらが勝手に恥ずかしがっただけですから、別に……」

ハラオウンが慌て取り繕うも、何だか妙に気まずい雰囲気になつてしまふ。

「そつだ！ フェイトちゃんほら、やる事があつたんだよね」

「あつ、う、うん！ そうだった」

高町のナイスフォローに、これまた慌ててハラウンが答える。そして、気を取り直すようにわざとらしく軽く咳払いをした。

「えと、じゃあ…… 実はあなたにお聞きたい事が幾つかあります。ここでは少々話しにくい内容ですので、屋上でも話しましょう。ご同行をお願い出来ますか？」

そう言われて、今更ながらにこの二人が管理局とやらの組織の人間だという事に実感が湧き始めた。どんな組織か知らないが、これは俺にとってもチャンスだろう。

色々と情報が手に入る……

「はいはい。同行しましょう。じゃあ、さっそく行きましょうか？」

そう言つてベッドから降り、唯一自由になっている右手を軽く回す。左手はもちろん吊っている。

そして、右手で点滴のキャスターを持ち、屋

上に向かつ

た。

前進

「じゃあ、どうぞ。話せる範囲なら幾らでも話しましょう」

屋上に着き、二人をベンチに座らせてから、その向かい側のベンチに腰を下ろし口を開く。

「じゃあ、先ずはお名前から」

「あゝ……」

……さて、聞かれると分かつてはいたが、俺にとってこの上なく答えづらい質問が来た。

普通の人なら名前ぐらい当たり前に答えるのだろう。それに彼女達は管理局という何ともらしい組織の人間のような。堂々と自分を紹介に盛り込んだのだから、少なくとも国家的な組織なのだろう。

警察に事情聴取を受ければ、大半の者は自分の名前など隠す気もなくなる。管理局という看板はそれとほぼ同じ効能を持つに違いない。

しかし、それはあくまで一般の話である。

そう言えば、一般や普通を何だか悪く言っているように聞こえるかもしれないがそんな事は決してない。

これ以上長くなるのもあれなので、簡単に理由の発表としよう。

俺は復讐に身を投じるようになってから、自分の名を自分の物として扱わないようにしてきた。

俺はやはり人間だったのだ。あの女に拾われた時から、自分がこれからやるであろう事を心の底では恐怖した。

しかし、俺は復讐をせずにはいられない存在。奴を見た瞬間に自動的な機械のように今の今まで考えていた事が消し飛び、奴を殺す事だけしか考えられなくなる。

そして、そんな自分を自分だと認めたくない。俺は、あの家族から名前を貰った俺がこんな事をしては今までの幸せだった自分が消えてしまう気がした。要は単なる我が儘だ。

幸運な事と言うべきか俺が力を付けるにつれ、業界ではある通り

名で呼ばれるようになったため、それからはその通り名を有り難く頂戴した。

まあ、結局長くなってしまったがそういう理由で俺は名前を聞かれると大分困る。

しかし、その通り名を名乗った所で怪訝な顔をされるに違いない。何せ名字も糞もないのだ。詳細の分からない怪我人から、一気に不審者に昇格するのは目に見えている。

なら、偽名を使えばいいと思うかもしれないが、偽名は後になって何かと厄介な代物なのだ。詳しくは省くが過去の失敗例から偽名は使いたくない。

なら、最終的に本名を名乗るしなくなるのだが……やはり、抵抗がある。

使える物は使うという考えを出した手前、これではとてつもなく情けないのだが仕方がない。

まあ、考えてみればここはどうやら俺の知っている世界じゃないし、俺は普段は何ら変わりない一般人だ。奴と会うまで　　または昔のように仕事をする時以外は大丈夫だろう。

少しぐらい……この境遇に甘えてもいいよな。

「雄大です。
たかはしゆうた
高橋雄大」

「雄大さん……ですね。では雄大さん。年齢は？」

「十八。あ……いや、今年で十九」

「出身地は？」

「日本の東京」

「えっ？　日本の人なんですか！？」

俺のその答えに今まで黙っていた高町が急に反応する。

「あ、ああ。東京つつても千葉よりだけど」

「私も日本の出身なんです。わあ、地球出身ってだけでも珍しいの

に、まさか同じ国出身の人に会えるなんて」

「地球出身！？ 何そのスケールのでかさ！ ここ地球じゃねえのかよ！？」

「うん。ここは魔法都市ミッドチルダ。地球はことは別の次元に存在する世界なの」

「どうりで分からない事だらけだと思ったよ」

いや、薄々感付いてはいたがそれにしただって母なる地球から離れてしまふなんて驚き物である。

何だかその事実を聞いた瞬間、足元が急に物寂しく感じられてきた。宇宙から初めて地球を見たガガーリンもこんな気持ちだったのだろうか。

「ここでは雄大君みたいな人を次元漂流者って言って、ミッドチルダも地球も次元を経て無数に存在する世界の一つなんだよ。そしてその無数に存在する次元世界を管理するのが、私達管理局の仕事ってわけ」

「最低限でありながらも分かりやすい説明ありがとう。しかし、時

に高町さん。雄大君という一見純粋なイメージを含みつつも、何故か呼ばれる本人にとってはこの上なく恥ずかしいその呼び方は、もう既にあなたの中では決定事項なのか？」

「そんなに変かな？ 私は普通だと思っただけだよ。じゃあ……ゆうゆうとか？」

「雄大君と呼んで下さい！ お願いします！」

何を言いだすんだこのレディは。そもそも、初対面で普通君付けで呼ぶか？

「まあ、取り敢えず。雄大さんはそういう立場の人なので、私達管理局が保護している状況なんです」

「ああ、それで色々聞かなきゃいけない訳か。俺が言つのもなんか違う気がするけど大変なんですネ」

ハラオウンの言葉に素直な気持ち打ち明ける。まあ、そうだろう。結局、彼女達がここにいる理由は仕事の為であって、彼女達の意志ではないと言っこと。

組織というものはそこら辺りが面倒でもあり、効率的である。良く出来た社会的集合体だ。

「じゃあ、質問に戻りますけど……あなたはここにいる原因またはそれらしき物に心当たりはありますか？」

ありまくりである。というか、自分で引き起こした事態である。

ここに来た原因と言うのは、おそらく奴との必殺同士の打ち合いで生じたあのブラックホールのような物に違いない。

原理は分からないが、俺の力と奴の力がぶつかり合い、その影響で生まれたエネルギーの集合体が“次元”と言う概念に作用してしまったのだろつ。

それなら俺だけの責任ではない。奴にも責任はある。いや、むしろ奴が全て悪い。

「えー、喧嘩をして気付いたらここにいたって事ぐらいしか分からない……です」

「喧嘩……ですか？」

「ええ、喧嘩です」

ハラオウンが疑問の眼差しを向けてきたが、きっぱり言い切る。嘘は言っていない。ただ、程度が段違いなだけだ。

「そうですか……なら、次は……」

それからハラオウンの質問は三十分程度続いた。その中には、犯罪歴があるかどうかなんて言う割と重大な事から、映画や小説の好きなジャンル、食べ物好き嫌いなどのどうでも良さそうな事まであった。

しかし、これらの質問は全て無駄ではないのだろう。一見無駄に見える質疑応答も、その人物を調べる重要な情報。

つまり、彼女のやっている事はプロファイリングのような物だ。俺は次元漂流者という保護される立場ではあるが、極端な話世界征服を目論む大悪党ならば、保護は保護でも拘置所での身柄預かりとなるだろう。

彼女はそれを調べているのだ。俺がこの社会に害を為す人物かそうでないか。それを判断した上で、今後の俺の処遇を決めるといった辺りだろう。

「では、これで質問は終わりです。それでここからは今後の事になるんですが……」

ハラオウンの少し改まった口調に、自然と佇まいを正す。ここからの話は俺にとってかなり重要な物だ。

「実は雄大さんの検査結果を見せて貰った所、リンカーコアの反応が検出されました」

「リンカーコア？」

聞き慣れない単語に思わず復唱する。

「リンカーコアって言うのは、魔導士の魔力の源……言うなればもう一つの心臓って感じかな。これがないと魔導士にはなれないし、もちろん魔法も使えない」

「へえ……所でさ、さっきからちよくちよく魔導士とか、魔法って言葉が出てくるけどさ具体的にはどんな物なんだ？」

高町の説明に納得しながらも、それとなく探りを入れてみる。この世界の魔法と呼ばれる概念は、俺の世界の魔術と一緒になのかどうかそれによって、俺もおおっぴらに力を使えるかどうかも決まってくる。

それにこの世界の魔法が俺のまだ知らない力だとするならば、俺はこの力を手に入りたい。奴を殺すには色々と力が必要だ。使える力が多いに越した事はない。

アイツはもう俺がいたずらに何かを求める事は無くなると言っていたが、結局奴を殺す事は叶わなかった。

だから、俺はまだ求め続ける。それが破滅の道でも

「この世界の魔法はリンカーコアから生成される魔力を使って、空を飛んだり、弾を作って飛ばしたり、ファンタジー小説とかでよく見るような物と大差はないかな」

「でも、魔法の行使には“デバイス”って言う機械を通すのが一般的なんだ。デバイスは魔法行使の補助的役割をしてくれるから、生身で魔法を行使するより効率的なんだよ」

「なるほどね。イメージ的には少し科学に傾いた魔法ってところ……それにしても、今更ながらにえらく進歩した世界に来たもんだな」

高町とハラオウンの説明に感心仕切った調子で呟く。何より魔法という力を社会全体が認めている事が驚きだ。秘匿とされるべき俺達の魔術とはそこら辺りも違う。

「それでなんですけど、雄大さんはリンカーコアを持っている時点で魔導士になれる資質を十分に持っているんです。次元漂流者として、雄大さんを元の世界に帰すにはその世界の座標を調べるのに時間がかかりますから、その間の生活手段として管理局の魔導士になるといいんじゃないか　と私は思っているんです」

「俺が？　それは願ってもない事だけど……魔導士になるために具体的に何をすればいいんだ？」

「まずは陸士士官学校に入って、そこで戦闘や魔法の基礎を学んでいくという形になりますけど……」

なるほど。魔導士とやらの力を得る為には色々と手順を踏まなくてはいけないようだ。

まあ、しかしいいだろう。どうせ向こうの世界に帰るあてもないし、理由もない。

理由に至ってはおそらくこちらの世界に存在するだろう。根拠のない直感だが、漠然と理解出来る。

奴はこの世界にいる。それだけは間違いのない事実だと。

ならば、奴の情報を集めつつ、魔法に、管理局に触れて見るのもいいかもしれない。

「も、もちろん、どうしたいかはあなたの自由ですし、個人的な事情もあると思いますから、無理にとは……」

「よし、ならそうするか」

「へっ?」

俺の答えが予想外だったのか、ハラオウンは間の抜けた声を出し、高町は意外そうな視線を俺に向けている。

「なんだよ。なんですか。そんなに驚く事かよ、元々そっちが持ちかけてきた話だろ？」

「いや……その、余りにもあつさりしてたから」

「あのですね、ハラオウンさん。俺は管理局に保護されるとは言え、この世界では何のパイプもない孤児みたいなもんですよ？　そこに藁が降ってきたら掴みなくなるのは当然だろう」

「あつ、……はい」

俺の様子に少し戸惑った様子を見せるハラオウン。いきなり語るような口調で話されたらそりゃ戸惑うだろうが……

「それにさ、どうやらこの世界には俺が生きる理由がありそうだし」

空を見上げ、何の感慨もなくポツリと呟く。その言葉が悲しげに聞こえたのか、高町とハラオウンは何だか申し訳なさそうな顔をする。

「なんて顔してんだよ。お二方。高町さんもハラオウンさんも綺麗

なんだから、ほれ笑顔笑顔……あっ」

言ってからまたやってしまったと内心舌打ちする。二人を見ると、高町はどうやら耐性が付いてきたのか若干頬を染めながらではあるものの微笑んでいるが、ハラオウンに至っては顔を真っ赤にして俯いている。

「あゝ……悪い。またやつちまった」

「気にしないでいいよ。別に嫌な気分にはならないから」

にやははと、高町は笑いながら答えるが、未だ再起しないハラオウンを見ると何とも複雑な気持ちになる。

「それと雄大君」

「うん？」

「高町さんじゃなくて、なのはでいいよ。こうして知り合ったのも何かの縁……でしょ？」

相変わらず人懐っこそうな笑顔を向ける高町に、妙に朗らかな気分になりながら微笑み返す。

「じゃあ、なのはで。ついでに俺も呼び捨てにしてくれると有り難かったりするんだけど……」

「うん、分かった。ゆうゆう」

「そんなに俺をいじめて楽しいか！」

冗談冗談と笑うのはを見つつ、ハラオウンに視線を向けると胸に手を当て、深呼吸をしていらっしやる。

いや……何だかすごく悪い事をした気分だ。

「あゝ、大丈夫？ ハラオウンさん……」

「大丈夫です。ごめんなさい」

謝られるとすごい罪悪感がのしかかる。いや、本当ごめんなさいハラオウンさん。

でも、言ってる事は嘘じゃないですからね。

「じゃあ、私も名前で呼んでくれると嬉しいな。セカンドネームで呼ばれるのは慣れてないから」

「ん？ ああ、じゃあフエイトで。俺の事は……」

「ゆうゆうだね」

「違いーよ！ 何この人達、超怖い！ 初対面で俺の性能をここま
で引き出した奴初めてだ！？」

「えっと……ごめんなさい……」

「本気と書いてマジだった！！」

とまあ、そんなこんなの一悶着あったが、これで取り敢えずは今後の方向性と、やるべき事が決まった訳だ。

まあ、今の状況は右も左も分からない立場ではあるが、それほど手詰まりな状況ではないし、昔に比べれば相当幸運な状況だ。

トントン拍子に進み過ぎた事に若干の不安を覚えるが、まあ構わないだろう。

「じゃあ、雄大。これ」

話も終わりに近づいた時、フェイトが茶色の封筒を俺に差し出す。

「何だこれ？」

「それは陸士学校への推薦書。それがあれば、陸士学校で訓練が受けられると思うから。まあ、本当はこの手の推薦はなのはの専門なんだけど……」

「そうなのか……まあ、推薦書なんて物が貰えるだけで有難いよ」

「うん、そう言って貰えると助かるな」

フェイトは俺にそう言いながら柔らかに微笑む。今更だが、本当にこの二人は美人である。

話を終え、屋上からそのまま二人を送り出す為に病院のエントランスまで向かう。

最初は怪我人にそこまでさせられないと二人に断られたが、大丈夫だと無理やり納得させ送っていった。

「またね、雄大君」

「じゃあね、雄大」

「ん。二人ともありがとう」

入り口で簡単な挨拶をして、二人は軽く手を振りながら病院を出ていく。それを見送りながら、俺も軽く手を振った。

二人の姿が見えなくなった後、手元にある封筒に目を落とす。

この封筒にこれからの先行きがかかっていると思うと、手に残る僅かな重量感がこの上なく貴重に感じられる。

さて、病室に戻ろう。また、子供達が勝手に使用していたら追い出さなければ……

「待ってる。また直ぐに殺しに行つてやる」

不意に口から出た無意識的な言葉は、自分のものとは思えないほど、ひどく低い声だった。

機動六課へ

あれから更に一ヶ月が経った。何だかすごく簡単に、尚且つ無駄にテンポ良く時間が過ぎて行っている気がするが気のせいだろうか。

取り敢えず近況報告。

二人に出会った日から約一週間後に無事退院した俺は、その足で陸士士官学校を訪れ、フェイトの推薦書のおかげでその日の内に士官学校へ入学が出来た。

士官学校と言っても、大学や専門学校のように学生生活を送るのではなく、どちらかと言うと魔導士専門の訓練施設のような物だ。

基礎的な魔法の知識、理論、活用法。武器、デバイスの取り扱いに戦闘訓練。

管理局なんて言うぐらいだから、あながち間違ってもいないのだろうが何にせよ事はかなり順調に進んでいっている。

しかし、さすがに予想外の事態とは起こるもの。今回の場合、俺はどうやら順調に進み過ぎたらしい。

はつきり言えば、士官学校……これからは訓練校と呼ばせてもらうが、その訓練が俺にとってほとんど既知の事実。もとい、役に立たないものだったのである。

こんな事を言えば、明らかに周りからは小言を言われるのは分かっているのだが、如何せん過去が過去だけにどうしようもない。

もちろん、訓練校の訓練全てが無駄だった訳ではない。特に知識面においてはかなり参考になったし、この世界の情報も大まかには整理が出来た。

ただ、戦闘訓練に関してはこれと言った収穫はない。昔から戦いには慣れている為、当然といえば当然なのかも知れないが、あまりいい刺激がなかったのは事実だ。

あつたとすれば、訓練校に戦技教導に来ていたのはと模擬戦闘を一度やった事ぐらいだ。

まあ、その事は取り敢えず保留で……出来れば思い出したくない。

まあ、結局の所。訓練校で魔導士になるためにがむしゃらにやりすぎたせいで、一年間かけて消化するカリキュラムをものの三週間ち

よいで消化仕切ってしまったという自分でも、アホなの？ 俺。つてぐらいの前代未聞の出来事を起こしてしまったのである。

おかげで訓練校の連中の間で話題になり、訓練校の教官には士官学校始まって以来の約一ヶ月卒業を言い渡され、拳げ句の果てには雑誌の取材までもが飛び込み、何だか大変な事をしてしまった。

才能だの、天才だのと言われる事もまちまちだが、俺は基本的に新しい事を始めた時は恐ろしく吸収が早いのだ。

それは言わずもがな奴への渴望が全ての原因である。

この修得の早さと、未だに力を求め続ける姿が実は俺が通リ名で呼ばれるようになる原因であるのだが、それはここで話す事でもないだろう。

以上近況報告終了。我ながらやつちまった感が拭いきれない一ヶ月でした。

さて、そんな俺がただ今何処にいるかというと、ミッドチルダ中央部、首都クラナガンから少し離れた湾岸部に建っているある隊舎の前に俺はいた。

「立派だね」

管理局の茶色の制服を着た俺はその隊舎を見て自分でも分かる気の抜けた声で呟く。

ここにいる理由はほんの数日前、教導の時に連絡先を交換し合ったなのはからの一本の電話が原因だった。

「機動六課？」

「うん」

なのはからの電話の内容はこうだ。なのはの友人である所の人、今新しい部隊　機動六課を設立しようとしている。その部隊に参加してみないかとの事だった。

「いや、俺にとっては願ったり叶ったりかも知れないけどさ、そこって選りすぐりの精鋭部隊なんだろう？　俺みたいな魔導士になつて一ヶ月ちよいの奴が行っても邪魔になるだけじゃないか？」

「正確には精鋭の卵達　だけどね。この部隊で実戦経験を沢山積

んでもらって色々な事を教えてあげて立派になってもらうのも部隊の目的の一つではあるんだよ。そう考えれば一ヶ月で訓練校卒業なんて前代未聞の事をした雄大君は立派な精鋭の卵。ほら、何も気後れする事なんてないでしょ？」

「まあ、管理局のエースオブエースにそう言われると悪い気はしないけど……そもそも何で俺なんだ？」

「六課の部隊長 私の友達でもある八神はやてちゃんがね、雄大君の噂を聞き付けて前衛部隊としてぜひ欲しいって言ってたの。それで私が知り合いだから、本人に聞いてみようか？ って……」

「構わないけどさ」

「じゃあ、はやてちゃんにそう言っておくね。おやすみ」

とまあ、一連のやり取りがあり今日俺は晴れて機動六課のメンバーとして正式に出向した訳である。

この世界に来てからかなり流されっぱなしでここまで来たが大丈夫だろうか？

今更ながらに心配になってくる。

聞いた話だと、なのはとフェイトもこの部隊にいるようだし当面は大丈夫なはずだよな。そんな風に無理やりその心配を心の中に押し込んで、その場で深呼吸する。

うじうじ悩んでいても仕方がない。取り敢えず行くとしよう。

仕上げて両手で顔を叩き、気合いを入れ直すと隊舎へと最初の一步を踏み出した。

隊舎の人に部隊長室と呼ばれる場所を案内してもらった。どうやら、俺が来る前に機動六課の設立式なるものがあったようだが、俺自身は交通機関のトラブルでももの見事に間に合わず、事前になのはに連絡をして、遅れる旨を伝えておいた。

しかし、そうだとしてもこれは最悪の第一印象だ。出向初日に理由はあれ遅刻し、六課の設立式にも参加できなかったのだ。一応、スカウトを受けた身ではあるから、そうあからさまに邪険にされる事はないだろうが、少なくとも良いイメージは持たれないだろう。

まあ、そこは仕事で挽回するしかない。幸先の悪いスタートだが行き着く所は決まっているのだから、そう深く考える事もないだろう。

気持ちが落ち着いてきたのを確認し、制服のシワを軽く伸ばす。

身だしなみもきっちりしている事を確認してから軽くドアをノックする。

「どつぞ」

室内から少し関西なまりの女性の声が聞こえてくると同時にドアが自動で開く。

中にいたのは同い年くらいの女性。肩にかかるくらいの自然な色の茶髪に、穏やかそうな顔。

関西なまりを聞いたからか、その容姿からか、何とも優しそうな人だと言うのが第一印象だった。

「失礼します。ただ今機動六課に出向致しました、高橋雄大三等陸士であります。交通機関のトラブルとは言え、初日から遅刻してし

まい申し訳ありませんでした」

敬礼と共に自己紹介と謝罪を同時に済ませる。言える事は先に言っておいた方がいい。後回しにしてタイミングを逃しては元もこもない。

「初めまして。機動六課課長及び部隊長の八神はやてです。これから宜しく」

「はい、宜しくお願いします」

俺は訓練校の教え通り、しっかりと張りのある声で出来るだけ好印象を与えるべく、いつもより五割増しぐらい真面目な顔で返事をする。

そんな俺の様子を見て、八神部隊長は何処か怪訝な、そして不思議そうな顔をする。

「なのはちゃんやフェイトちゃんから君の事はそれなりに聞いたけど……えらい話と違うな」

「そう……なんですか？」

「何や聞いてた話やと、病室の布団を武器に暴れ回るかなりの変人で、会話の所々に女たらしの可能性が見え隠れする人や聞いてたけど……」

「いい称号が一つもない！」

ちよつと待て。あの二人どんな説明したんだよ。確かに行動面に関しては事実だよ、事実だけど、あいつらあの時の事見なかった事にするとか言ってたのにばつちり口外してくれちゃってんだろぅが。

「あつ、そういうツッコミもあるって聞いてたで」

「何でそんな事分かるの！？一回会っただけであいつらそんなに俺の事見抜いてたの！？そんなに俺の心はすかすかか！ガラス張りか！」

そこまで言つて、ハッと我に返る。やってしまった……つい癖でツッコんでしまった。

頭を抱えなくなる衝動に襲われながらも、それを何とか制してわざとらしく咳払いをする。

「……すいません。癖で」

「ええよ。なのはちゃんやフェイトちゃんの知り合いなら信頼は出来るしな。いつものように振る舞ってくれて大丈夫やで。私も堅苦しいのは嫌いやしな」

そう言つて、八神部隊長は優しくそうに微笑んでくれる。ヤバイ……この人超優しい。

「じゃあ、お言葉に甘えて……」

「うん。ええ子やなゆうゆう」

「俺の感動を返せ!!」

叫ぶ俺を見ながら、八神部隊長はけらけら笑っている。いや、予想はしてたけど……なのはさん、怖い子だわ。

「それじゃあ、挨拶も済んだし取り敢えず俺は今日これからどうしたら?」

「まあ、本来ならフォードメンバーと合流してなのはちゃんの教

導を受けてもらいたいんやけど、その前に話したい事があるからちよつといいか？」

言われてソファーに促される。もちろん拒否権な どないし、行使するつもりもないのだが、部隊長の部屋だから妙に緊張する。

無言でソファーに腰をかける。真新しい革の匂いがほんのりと鼻をくすぐり、少しだけではあるが身体の強ばりがほぐれた心持ちになった。

「で？ 俺なんかの何を聞きたいんです？」

「実はな、ここにおるメンバーは私が色んな方面を駆け巡って捜し出した精鋭の卵。もしくは間違いない精鋭ぞろい。だから、私はメンバー全員の力や技術をそれなりには把握してるつもりや。けど……」

「俺に関してはほとんど情報がない……と」

俺がそう言つと、彼女は頷き肯定する。

「せやから、雄大君の事を色々と聞きたいんよ。まあ、言いたくない事を無理にとは言わんし、上司の世間話に巻き込まれてもたどで

も思つて……な？」

「ははっ……何だよそれ」

思わず笑つてしまふ。呼び止められて何かと思えば世間話だ。調子が狂うのも当然だろう。

「分かったよ。じゃあ、何から話したらいい？」

「そうやね……雄大君は次元漂流者やけど、家族と離れて寂しくはないの？」

「寂しくはないな。まあ、家族つっても母親らしき人が一人だけだったし……」

「……らしき人？」

まあ、アイツはどっちかと言えば歳の離れた姉つて感じだったしな。

つか、昔にアイツが『少しは私を親っぽく敬え』とか言いやがる

から、日頃の恩も込めて恥ずかしいのを我慢しながら『母さん』と言ってやったら、問答無用で蹴り飛ばされて『お姉さまと呼べ!』と見事に無茶苦茶っぷりを披露する人間なのであるアイツは。

育ててもらった恩がなければ、本気で関わりたくない人種だ。さすがにあれを母親と断言するのは全国の母親に失礼ってもんである。

あんなのと友達だったなんて……今さらながら俺の両親、なんか凄い人たちだったんだなと実感する。

「俺が十五歳の時に本当の両親が事故で死んでな。両親の友人だった人の養子になったんだ。一応育ててもらったから、母親らしき人って事」

両親が死んだのは事故ではないのだが、さすがに真実をここで話すのは躊躇われる。

真実を言えば、俺は“今の”俺ではいられなくなる。それは俺にとって何の得もないし、彼女には考えなくてもいいことを考えさせてしまっただろう。

なら、伏せるべきだ。血なまぐさい話を話すのもあれだし、被害者ぶるのは自身の中だけで十分。

そんな俺の言葉を聞いて八神は何とも気まずそうな顔をする。

「……ごめん。私、無神経やったわ」

彼女は俺に自分の両親が死んだという事実を言わせてしまった事に負い目を感じているのだろう。優しい奴だ、優しすぎる。

「そうだ、八神の家族は？」

そんな沈んだ空気を何とかするべくこちらから話をふってみる。

「えっ、私？」

「そう。失礼かもしれないけどさ、八神を初めて見て、何かすごく家庭的な雰囲気だなと思ったから、どうなのかなあと」

「そうやね。私も昔は一人やったけど、今はかけがえのない家族が出来た。シグナムにシャマルにヴィータにザフィーラ。それに末っ子のリイン。皆、私の大切な人で、私の大切な家族。因みに家族全員、機動六課に所属してるんよ」

「マジで！？ 超人家族じゃん！」

いや、だってそうだろう。何回も言うようだが、機動六課はエリート精鋭部隊なんだぞ？ そんな場所に家族で乗り込んでくるとはすごいを通り越して恐ろしい。

「まあ、私の事はええよ。私は雄大君の話を聞きたいんやから」

「別にいいだろ？ 世間話なんだし」

「ふふつ、それもそうやね」

微笑む八神を見て、自然とこちらも頬が緩む。あれだ。彼女は俗に言う癒し系だな。何となくだけど……

「じゃあ……これはなのはちゃんから聞いたんやけど……」

そんな八神が何気ない口調で言葉を紡ぐ。

「雄大君。何か戦い慣れてるって聞いたんやけど、地球で武道でもやってたん？」

一瞬、眉がピクリと動いたのが自分でも分かった。しかし、それを表には出さず口を開く。

「そんなものかな。さっき話したアイツ　俺の育て親の事な。アイツが男なら強くないとって理由だけで色々やらされたんだ。それがもう凄まじくて凄まじくて……あつ、ごめん。思い出したら涙が……」

「た、大変やつたんやね」

苦笑いを浮かべつつ、ティッシュ箱を差し出す八神。すかさず一枚取り涙を拭う。

まあ、きっかけは違うがアイツにしごかれたのは真実だ。嘘は言っていない。

さっきの家族の話も今の話もそうだが、俺は全ての真実を語らず、事実を脚色して話している。それで嘘をついてはいないと自分を納得させているのだ。

それはただの屁理屈で自己満足。

分かってはいるのだ。しかし、そうでもしないと俺の立つ瀬がなく

なる。

俺は基本自己中だ。自分の為にしか動けない愚か者である。

「悪い。まあ、でもそういう理由で」

「そうか。じゃあ、そろそろ現実的な質問にいか」

「いつから質問形式になったんだよ」

「話の腰を折らない」

八神にそう一蹴され、言い返す言葉もなく押し黙る。しかし、そう言った彼女は立ち上がり机を軽く片付けると部屋の出口に向かって歩き始めた。

「おゝい、八神さん？ 何処に行かれるのですか」

「何処つて……雄大君に答えてもらおうかと」

「俺なら此処にいますよ。何、もしかしてこの状況で第二の雄大

君が出てきたりする訳？ セカンド雄大君、セカンド雄大君なのか？」

「馬鹿言っ てんとはよ行くよ」

「だから、何処に……」

俺がそう言つと、八神はニヤリと笑う。

「え……いやいや、何で笑つてんの？ 何でそんな小悪魔的な笑みなの？」

そんな嫌な予感にも似た寒気を感じていると、八神はその笑みを浮かべたまま俺を指差してこう言った。

「雄大君の身体に聞ける場所や」

「はっ？」

それから八神に引きつられ、連れてこられた場所は隊舎の外。湾岸部に浮かぶ機動六課専用の演習場だった。

どんな仕組みなのか、廃ビルやら何やらが海のと真ん中に佇んでいる。かなり、奇妙な光景だ。景觀もくそもあつたもんじゃない。

「なあ、身体に聞くんてどういう意味だよ。そろそろ教えてくれてもいいだろ八神部隊長さんよ」

「着いてからのお楽しみや」

そんなやり取りを繰り返す事、実に五回。微妙な数字とか思った奴。安心しろ、俺もたった今そう思った。

演習場の一つの廃ビルをひたすら上に上がりながら軽いため息をつく。全く何だと言うのか……まさか、今さら遅刻の責任をとらされるんじゃ。

そんな事を考えている間に屋上に着く。数階分太陽に近くなったただけで、嫌に視界がまぶしく感じた。

そんなまぶしさの中で屋上にいる四人の先客を発見。

一人は俺のよく知っている奴だ。長い栗色の髪をサイドポニーでまとめた白い教導服の女性。高町なのはその人である。

そして、その隣。管理局の制服を着て、空中に表れたモニターやらコンソールやらを結構な速さで操作している眼鏡の女性。

そこから少し離れた場所、なのはから見えて眼鏡の女性がいるもう一方の隣に、桃色のポニーテールの女性が腕を組みながら、眼下に広がる演習場を鋭い眼光で照らしている。

桃色ポニーテールの女性のそのまた隣には、赤い髪を二本の三つ編みにした、小さい女の子がポニーテールの女性同様厳しい顔でビルの下を見下ろしていた。

八神はそんな四人の元にすたすたと歩いていく。一、二歩遅れつつ俺も着いていった。

「どうや？ フォワード陣の調子は？」

「あつ、八神部隊長」

八神が眼鏡の女性に声をかけると同時に、他の三人の視線が一気に

八神の方向に向いた。

「はやてちゃん。わざわざ、どうしたの　　って雄大君!」

「うす。なのは」

なのはが驚いた様子で俺を見る。取り敢えず軽く挨拶しておいた。

「はやて!」

すると、俺の前をすごい勢いで赤い風が通り抜けていく。もちろん比喩だがそれだけ速いスピードで、あの少女が八神の前に突っ走っていったのである。

「どうしたの?　わざわざこんな所に……」

「ヴィータちゃん、それさっき私が言おうとした事……」

なのはがそう言うが、ヴィータと呼ばれた少女は意に介さず八神の隣で笑顔を浮かべている。

ヴィータ　確かさっきの八神の話で出てきたな。という事は……

「あの、あなたが超人家族の一員その一さんでしょうか？」

「誰だ？　てめエ」

一気にガラ悪くなったぞ、おい。

「八神さん八神さん。この子お宅の一員ですよ。いいの？　こんな小さいなりに既に悪い方面で大人の階段登ってるけど……」

「大丈夫大丈夫。ヴィータはいつもこんな感じ、正常、いつも通りや。それよか雄大君。気を付けたほうがええで？」

「はい？」

えと……話が見えないんだけど、俺は何に気を付けたらいいんだろうか。

ちらりとヴィータ少女を見ると、何故か俯いて身体全体を震せていらっしやる。

千切れんばかりに両手が握り締められ、何かミシミシと音が聞こえてきました。何これ？ またまた、嫌な予感がするんですが気のせいですよ。うん、きっとそうだ、そうに決まって……

「子供扱いすんじゃないやエエエエエエエ！」

「向こうずねっ!？」

瞬間、絶叫と共に向こうずねに衝撃が襲い掛かる。あまりの痛さに、衝撃を受けた部分をこちらにも叫んでしまう。

「痛い痛い痛い痛いイイイイイイ!! 何すんじゃないこのガキイ!
! 割れた、絶対すね割れた!! どうしてくれんじゃない、オイイイイイ!!」

「知るかこのばーか。お前が私を子供扱いするから悪いんだよ」

「八神さああん! 即刻、今すぐこの子に蹴つていいものと駄目なもの区别を教えてあげて! 蹴つていいのは退屈と親しくもない上司の誘いだって教えてあげて!!」

「だから、気を付けたほうがええて言っただやろ?」

「助ける気ゼロ!?　むしろ、楽しんでるなコノヤロー」

すねを押えて蹲りながら、そんな馬鹿な会話を繰り返す俺に八神は言わんこっちゃないと呆れている。

「つか、こんなもん予想できる訳ないだろ。そっちにとっては言わんこっちゃないでも、俺にとっては未知との遭遇なんですけど。」

「主はやて。しつこいようですが一体どうされたのですか?」

そんな中、桃色ポニーテールの女性が八神に再度此処に来た理由を聞く。それにしても、主って……何かえらく堅物なんだなこの人。

「用があるのは私じゃないんよ。この人」

八神はそう言っ、蹲っている俺に視線を向ける。そのせいで、その場の全員の視線が俺に集中する。

「ほら、挨拶挨拶」

「あ、ああ。えと、この度機動六課に配属になりました。高橋雄大
三等陸士です。右も左も分からない新人ですがよろしくお願いしま
す」

「ほう、お前が主の言っていた高橋か。何でも訓練校を約一ヶ月で
卒業したらしいな」

軽く自己紹介をすると、桃色の女性が興味深そうな目で俺を見始め
る。何、この人。何か怖いんですけど。

「なのはちゃん。今、フォワード陣はどうしとるん？」

「今は訓練が一段落した所、もうちょっと経ったらまた始めようと
してただけ……」

「じゃあ、その後もいいから少し演習場貸してくれんかな？」

「別に構わないけど……何するの？」

なのはの疑問は最もである。仮にもこの部隊の部隊長がわざわざ演
習場を貸して欲しいと言いだしたのだ。何かあると思うのが普通であ
る。

「ん、ちょっとシグナムとヴィータのどっちかと雄大君に模擬戦してもらおうと思ってな」

「はい!？」

いきなり何言ってるんでしょかこの人。

「ちょっと待て待て待て待て。何？　もしかして身体に聞くってそういう事？」

「そうや。現実的な質問っていうのは、雄大君がどれだけの力を持っているのかって事。強かろうと弱かろうと、どんな戦い方をするか、どんな魔法を使えるか、私が皆に指示を出させてもらう立場にいる以上私はしっかり皆の事を知らなあかん」

そういう彼女は何処か誇らしげで言ってる事に間違いはないんだが
.....

「だからってそんな急に.....」

「部隊長命令や。諦めて従ってな」

何ともにこやかな笑顔で俺の言わんとする事を無言で封殺してくる八神さん。

女性が浮かべるこの手の笑顔は何度も見てきた。これは“ちつとも笑ってない”笑顔である。

有無を言わせない女性の武器。大抵の男はこれには勝てないのである。それは俺も例外ではない訳で……

「……分かりました。やります、やればいいんですよ。その代わり、少しぐらい準備させてくれよ」

「それぐらいはええよ。フォワード陣の訓練がもう一段落するまで少し時間がかかるやろうからな」

もう逃げ場もない。観念して白旗を上げつつ、嫌々ながらも命令を聞き入れた。

しかし……状況としては悪くはないのだろう。ここにいる人達のレベルを知る事は出来るし、それによって俺がどれだけ力を出してもいいか測る事も出来る。

まあ、あちらはどうかは知らないが俺は本気でやるつもりはない。
俺の本気なんてものは奴にしか向けられないからだ。

あまりに相手が強くて、俺や奴のような裏の存在だとしたら少しは
スイッチが入ってしまうかもしれないが、ここにいる人達はそんな
存在ではないだろう。

「じゃあ……シグナム。雄大君の相手頼めるか？」

「はい。主の頼みとあらば喜んで。それに、個人的にも彼には興味
がある」

そう言って、こちらに嬉々とした視線を向けてくるシグナムという
女性。

ただそれだけの行為で俺の背筋に寒気が走る。無言の重圧が俺を襲
い、四方八方から圧迫してくる。

なるほど……この人は相当な実力者だ。この手のプレッシャーはそ
れなりに戦いを経験した者、または武道の達人レベルに 達した者
達が放つ独特なもの。

言い換えれば覇気とか、オーラの類。その場にいるだけで世界に干

渉する空気を持つ絶対的な実力者。

しかし、殺気は感じられなかった。その覇気に少しでも濁りがあれば殺気と化す訳だが、それを感じられないという事は彼女はまだ本当の“闘い”を知らないのか、それともそれを隠せるほどの実力者なのか。どちらにしろ油断すれば、一瞬で終わりだろう。負けるつもりでいるが、あまりに一瞬で終わると俺も測りたいものが測れない。

「じゃあ、着替えてきます。さすがに制服は無理だし」

「ん、準備出来たら戻ってきてな」

そうして、隊舎に戻るべく四人に背を向ける。さて、少々急な展開だがいい機会だ。自分が最強の主人公になったみたいで少し気分は悪いが、俺が少しは強いのだと大いに勘違いしてもらおうとしよう。

模擬戦

「はい、じゃあ午前の訓練はここまで。皆お疲れ様」

「お、お疲れ様です……」

その言葉と同時に私は系が切れたようにその場にへたり込んでしまった。周りを見ると私以外の三人もそうだった。全員が肩で息を吐き、ぐったりしている事からこの訓練の厳しさがひしひしと伝わってきた。

私　ティアナ・ランスターは、今の今までこの廃ビルだらけの演習場で新部隊に配属されてから初めての訓練を受けていた。

教導官はかの有名な管理局のエースオブエース高町なのは一等空尉。この人の教導を受けられるのはそうそうある事ではない。しかも、ある部隊に付きつきりと言うならば尚更である。

私の現在所属している部隊。特定遺失物管理部機動六課。この部隊に所属が決まったのはほんの数ヶ月前、コンビを組んでいるスバルと魔導師Bランク試験を受けた時だった。

正確に言えば、その時は勧誘だけだったけれど……結局私はその話に魅力を感じて此処へ来たのだから一緒のような物だと思う。

そして、機動六課の所属初日。さっそくなのはさんの教導が始まり、私達は午前中だけで今のヘトヘトな状態に至る。

「じゃあ皆。疲れてる所悪いけど、ちよつと見学場所まで移動しようか？」

確かにここでじっとしている訳にもいかない。でも、ちよつと待つて。何でわざわざ見学場所なの？

「あの、なのはさん。どうして、見学場所、何ですか」

私以外の三人も同じ疑問を持っているだろう。私が代表してその疑問を口にする。

ただ、訓練を切り上げるなら隊舎に戻ればいいだけなはず。それをわざわざビルの屋上の見学場所にするのはきつと何か理由があるはず。

「うん、実はね今からシグナム副隊長が模擬戦をするの。だから、皆にはそれを見学してもらおうと思ってね」

なるほど、それなら一応は納得できる理由だ。しかし、シグナム副隊長が模擬戦をするのはいいとしても相手は誰なのか。なのはさんか、フェイト隊長か……

考えても仕方がない。始まれば嫌でもわかる事だ。そう思い立ち、足に力を入れ無理やり身体を立たせる

「あれ？」

しかし、無理に立ち上がったからか足腰に上手く力が入らずよろけてしまう。

そのまま、尻餅をつく形で倒れかけた時……不意に優しい力が私の背中を支えた。

何事かと後ろを振り替える。そこには

「おいおい、大丈夫か？ オレンジ頭のお嬢さん」

全身真っ黒な装いの男の人がこちらを見下ろしていた。

何をやっているんだろうか俺は。これでは八神に女たらしの可能性が見え隠れするなどと言われても仕方ないようなものである。

隊舎に戻り、着替えを終えた後、真っ直ぐ演習場に戻ってくると四人の少年少女が半端なくぐったりしていた。

あれが八神の言っていたフォワード陣だろう。俺もあの中に入るのか……俺多分一番年上じゃん。

みたいな事を考えながら、その集団に近づいていくと、オレンジ頭の少女がバランスを崩して倒れそうになっていたので思わず支えてしまった。というのが、此处に至るまでの経緯である。

「　　っ！　　す、すいません！　　ありがとうございます」

「あゝ、どういたしまして。それにしても、こんなボロボロになって……なのはお前容赦ないな」

「何言ってるの？ 明日からは雄大君もこうなるんだよ」

「マジで！？ 本気で他人事だと思ってた」

ついさっき自分がこのメンバーの中に入る事を自覚していた奴が言う台詞ではない。自分の思いを見事数秒の内に反転させた馬鹿の台詞である。

あゝ、むなしいむなしい。

「あ、あの、なのはさん。この人は……」

そんな事を考えていると、青い髪にハチマキが特徴的な少女が疲れた様子ながらも、はつきりとした口調でなのはに質問する。

「あ、紹介するね。こちら高橋雄大三等陸士。皆と同じ前衛部隊として機動六課に来た新人さん」

「高橋って……もしかして、訓練校を一月で卒業したっていうあの高橋雄大さんですか！？」

青い髪の少女は俺の名前を聞いた途端、今までの疲れは何処へやら。溢れんばかりに輝く視線をこちらに向けてきた。

「あの私、スバル　スバル・ナカジマです！　よろしく願います！」

「あ、ああ、よろしく」

そんなナカジマの勢いに押されながらも、一応最低限挨拶し返す。

「あの……それで雄大さんは此処に何を……」

よっぽど気になったのか、赤い髪の少年が言いづらそうにしつつも尋ねてくる。

「うーん、不可抗力というか天命というか……強いて言えば、上司の新人いびり？」

「雄大君、この会話はやてちゃん達にもばつちり聞こえてるよ」

「すみませんっしたー！！　ほんの出来心なんです！　人間、愚

痴の一つぐらい言いたくなるじゃないっすか。そう！ これはつまり俺に非があると言うよりは俺もあなた様も人間であるが故の確執なんだ！ だから、俺はそんな人間の本質を自然と実行しただけでして……って、いつの間にか逆ギレ的なテンションになってるうう！ 長々喋りましたが調子乗ってすいませんっした！！」

恥も外聞もなくこれだけの台詞を一度も噛まずに、硬い硬いアスファルトに高速で土下座する姿はもうどうしようもなく情けないものであった。

いや……まあ、俺自身なんですけど、あまりの情けなさに自分で自分を認めたくない節があるというか、これが自分だと信じたくないというか……

「嘘だよ」

「お前何なの！？ お前いつもそんなのか！ 管理局のエースオブエースは実は猫かぶった小悪魔だってか！？」

「そんな事ないよ。こんなのは雄大君に対してだけ」

「尚更、質が悪いわ！」

とまあ、こんな具合の会話に四人のフォワード陣は呆然とした様子で俺の事を見ている。

オレンジ頭の少女に至っては既に蔑みを含んだ、冷たい視線も一緒にだ。今更ながらに、俺この部隊でちゃんとやっていけるかな？

「雄大君。そろそろ行かないとシグナムさん怒るよ？」

「あゝ、はいはい。じゃあ、とつと行つて、ボコボコにぶちのめされて来ますよ」

その言葉にフォワード陣の四人は呆然とした様子から一転、驚愕の表情になるが俺はこれ以上弄られるのも勘弁なので、さっさと歩いてその場を離れる。

さてと、どう負けようかね……

高橋雄大 私も名前だけは聞いた事があつた。

次元漂流者ながらも訓練校に入学し、一ヶ月卒業なんて前代未聞の事を成し遂げた今巷で話題になりつつある天才。

そんな人物が此処にいる事にも驚いたし、何より一番驚いたのはあの人からこれである事。

「もしかして、シグナム副隊長の模擬戦の相手ってあの人なんですか!？」

「そうだよ。皆には今までの管理局での仕事とか任務とかで、大体の力や能力なんかは把握できてるけど、雄大君は未知数だし、これから通常の手段で把握していたら時間がかかりすぎる。だから、模擬戦で手っ取り早くって言うのが八神部隊長の考えね」

なのはさんの説明は理解出来る。しかし……

「でも、いきなり副隊長と模擬戦なんて危ないんじゃない?……」

「キャラの言うことは最もだよ。けど、それなら私が許可しない。雄大君は確かに魔導師になって日は浅いけど、それを補って余りある力があるんだよ」

ちびっこ　キャロの言う事を私も考えていた。訓練校を一ヶ月で卒業したとは言え、魔導師として経験が浅ければどうやっても魔法を使った戦闘には慣れていない。言わば素人同然。

そんな状態で部隊の副隊長クラスと模擬戦だなんて自殺行為も甚だしい。相手にもならないはずだ。

しかし、なのはさんはそれを許可した。その経験の浅さを補って余りある“力”。それはつまり

「レアスキル……ですか？」

そうとしか考えられない。そうでなければ説明がつかないのだ。しかし、なのはさんの答えは予想外の物だった。

「ううん。雄大君はレアスキルらしき能力は持ってないと思うよ。私も全部を知ってる訳ではないから、詳しくは分からないけど」

レアスキル持ちじゃない？　もう何がなんだか分からなくなってきた。今日は何だか衝撃を受ける事ばかりである。

「まあ、取り敢えず移動しよう。見ればすぐに分かるから」

そういうなのはさんの顔は何だか嬉しそうだ。ますます分らない。

何だかモヤモヤした気持ちのまま、疲れた身体を引きずり私達はその場から移動していった。

少し歩くとその人はすぐに見つかった。

桃色のポニーテールはそのままに、管理局の制服ではなく明らかに戦闘用の鎧甲冑に身を包んでいた。

「来たか。高橋」

その人 シグナムは、右手に持った両刃の西洋剣を持ちなおしてそう口を開く。

「うわー、ヤル気満々ですね。言っときますけど、そんなに期待しないで下さいよ。俺なんてそこの一般人と変わらないんですから」

「謙遜しなくていい。お前の事は主はやてと、高町から聞いている。

何でも武道に精通していたらしいな」

そう言つて、うつすらと微笑みを浮かべる彼女は何とも楽しそうに見える。

「まあ、それなりには……」

「なら、問題あるまい。私も剣を手にし続けてきた者。相手の度量ぐらい分かっているつもりだ」

シグナムはゆっくり目を開き俺を見据える。その途端に再び寒気を感じた。屋上で感じた物と同様の純粋な覇気を。

「もし期待外れなら、ビルの屋上で目を合わせた時か、今この時にお前はそんなに平然とはしていないはずだからな」

「あゝ、そんなら今倒れたら模擬戦は無しって事にしてくれるんすか？」

「そんな事は私が許さん」

「そう言つと思つたよチクショ」

軽い希望を持って言ってみたものの、やっぱり模擬戦をする事は既に決定事項らしい。

軽くため息をついて着替えてきた昔の服。つまり奴と戦っていた時に着ていた黒のコートからナイフを取り出す。

因みにコートだが、こちらに來た時見るも無残な様子だったらしいそれを何とフェイトが直してくれたらしい。

これは純粹にありがたかった。このコートとは俺が初めて魔術師と戦った頃からの付き合いだ。それを手放すのは何かと抵抗があったからな。

「それがお前のデバイスか？」

「いやいや、違いますよ。俺、そもそもデバイスなんて訓練校の支給品の簡易デバイスしか触った事ないんですから」

その言葉にシグナムが初めて驚いたような顔をする。そりや当たり前か。この世界ではデバイスを使うのが通常なのだから。

「その代わりと言うのもあれですけど、一応これ刃付いてるんで…」

「安心しろ。私のレヴァンティンもちゃんと切れるからな」

「いや、それは安心できねえよ」

そんな若干ずれた会話をしていると、演習場に聞き慣れたなのはの
声が響く。

「はーい、二人とも準備はいいですか？」

その声に見学場所にいるなのはに軽く手を振る。

「じゃあ、さっそく……模擬戦始め！」

なのはの声が響く。それと同時にナイフを逆手に持ち、シグナムか
ら見て半身の状態で立った。

シグナムは剣を両手で握り、腰を落として典型的な西洋剣術の構え
を取る。

「構えなくていいのか？」

「これが構えですよ」

ナイフを持ったまま直立している俺にやる気がないと思ったのか、若干苛立ちを含んだ口調でシグナムは尋ねてくる。

しかし、実際のところこれが構えみたいなものなのだから仕方がない。

シグナムが剣の切っ先を真上に向け、身体と平行になるように構え直す。

瞬間、ぞわぞわともどかしく俺の身体にまとわりついてた寒気が針のように俺を突き刺し始めた。

その感覚と同時に目の前から風が吹く。駆け抜ける疾風は鈍く光った鉛の塊を臆面もなく振り下ろしてきた。

俺の身体はそれに何とか反応した。右手に持ったナイフで眼前に迫ったその鉛の塊を受け止める。

「は……やっ！」

目の前にいるのはシグナムの顔。この一瞬であんな重そうな鎧ごと
此処まで来やがった。

思わず口に出た言葉は本心からのものだった。言い訳も出来ない。
完全に油断していた。

彼女 いや、彼女達を少し過小評価していた。これは本当に予想
外である。

「ハッ！」

シグナムは俺に初撃が受け止められたのを見ると即座に剣を引き、
次は横なぎに俺の胴を狙う。

「危な……っ！」

それをさも危なげにギリギリの所で受け止める。しかし、剣の重さ
は殺しきれない。そのまま振り払われるように軽く横に吹っ飛ばさ
れる。

吹っ飛ばされながらも考える。これは……こっちの思い通りには負

けさせてくれないかも知れない。

彼女達のこの強さは俺がこの世界の戦いに慣れていないのもあるだろうが、それを差し引いても相当なものである。実際、初撃の速さには一瞬ひやつとした。

まあ、それでも。奴には及ばない。

奴と比べる事が間違っているのかもしれないが、俺のしてきた戦いに比べればかなり楽な部類である事には変わりはない。

吹き飛ばされた身体を立て直すため、地面に手をつき無理やり身体を空中で転換させる。そのまま、四つんばいのような格好で地面を滑っていきながらも足に力を入れ何とか勢いを止める。

そんな俺にシグナムは驚きの表情を浮かべた。その表情は先ほどよりも少し色濃く見える。

「どうしましたよ？」

「いや、少し驚いただけだ。お前のその身体能力にな」

まあ、確かに普通で考えればとんでもない体勢の立て直し方ではある。

そんな合間も束の間。直ぐにシグナムの剣が俺を襲う。それを受け止め、幾分か大振りのものではあるが次は反撃を一つ。

それは案の定容易く避けられ、更に無数の剣筋が俺を襲う。

そしてまたそれを危なっかしく避け、打ち合いながらまた思考する。

当初の俺の考えは彼女の攻撃を今みたいに危なっかしく防戦しながらも、何処かで隙を与えてあっさりやられるというプラン。

しかし、それは加減というか隙を与えるタイミングが中々難しい。仮にも防戦していたのに、余りにあっさりと隙を与えると彼女のような武人に近い人種には本気でないのが直ぐにばれる。

本当にギリギリ。防御があと一息間に合わなかったというぐらいの隙でなければならないのだ。

だが、彼女の予想以上の強さに少しだけ欲が出る。本来、目立ちたくもないし、もし相手が半端な強さならうっかり大怪我を負わせて

しまう可能性がある事から“本気”を交えた動きはしないようにしていたのだが……

（これだけ強いなら一撃……いや四〇五手はいけるな）

心の内で人知れず笑う。最近は無沙汰だったんだ、少しでも本気を出せるなら儲け物だろう。

血が騒ぐ。口が乾く。訳もなく鳥肌が立つ。

大サービスだ。少しでも見せてやろう。俺に内包された技術の一つを……

「うそ……」

私は目の前で起こっている事を信じ切る事が出来なかった。

今、私はシグナム副隊長とあの男の人 雄大さんの模擬戦を見て

いる。

最初はなのはさんの言っている事も只の冗談だと思っていた。あの人には期待するほどの力はなく、一分と経たずシグナム副隊長にやられてしまつたろうと半ば期待してさえいた。

だけど、目の前にあるのはそんな私の想像とは似ても似つかない光景だつた。

シグナム副隊長の持つ剣の形を模したアームドデバイスは剣を使わないような私でも見惚れるほどに綺麗に力強い剣筋で宙を舞つていた。

そして、あの人 雄大さんは何の変哲もないナイフ一本でその鋭い剣筋と打ち合っていた。

シグナム副隊長の実力は耳にした事がある。何でも魔導師ランクで言えばニアSランク。並みの魔導師では相手にすらならない。

だと言うのに、魔導師として日も浅い次元漂流者が……まして魔法も何も使わず只の近接戦闘だけでシグナム副隊長の前に何分も立ち続けているのだ。驚かずにはいられない。

「シャーリー。ちゃんと雄大君のデータ取れてる？」

「はい。でも、デバイスも無しで何の魔法も使わずに生身でシグナムさんと打ち合うなんて……あの人すごいですね」

「うん。雄大君の武器はキャロみたいなレアスキルでもなく、かといってスバルやエリオのような魔法を駆使した近接戦闘でもない」

「

そうあの人の武器はそんなものじゃない。もっと人間として根本的なもの。人間が誰しも持つ最低限の土台

「ずば抜けた身体能力　それが雄大君の武器。その身体の使い方、スバルやエリオみたいな前衛向きの戦いには実際の戦闘でも参考になると思うし、ティアナやキャロみたいな後衛型には相手の接近への対処の仕方もある。だから、皆を連れてきたんだけどね」

そう　身体能力。言うなればそれが雄大さんのレアスキルだろう。

確かに自分にあればどの身体能力があれば、射撃のポジションも取りやすいし、もしもの対処も比較的簡単だろうと思う。

でも、あの人の動きを見て私は直感的にあの場には辿り着けないと思ってしまうた。

私の頭をよぎった言葉。

天才。雄大さんのような人を本当の天才と言っのたろう。

比べて私はどうたろう。比べるまでもない私は凡人だ。確かにあの場には辿り着けないと思う。

でも、私はそんな事で立ち止まらない。私には私のやる事が……証明したい事がある。

天才たろうがなたろうが、同じ場に立てなくとも限りなく近づく事は出来る。凡人の私に出来る事はそれぐらいだ。

そう。私は止まらない。いつか私の　ランスターの弾丸は何でも貫けるんだって事を証明できるまで。

なら、私に今出来る事は雄大さんの動きを少しでも盗む事。そう思っ、しっかりと二人の打ち合いに目を向ける。

状況は今だに変わらない。シグナム副隊長の再三の攻撃に雄大さん

は持ち前の身体能力で打ち合っている。

しかし、どちらかと言うと雄大さんの方が防戦一方。さすがに身体能力が高いからと言っても、やはり勝つのは難しいのだろう。反撃もシグナム副隊長の攻撃十回毎に一回と言った具合だ。

このままだと時間の問題だろう。雄大さんの表情も苦しそうなものになってきている。

後何分保つだろうと、完全に外野気分で雄大さんの表情を見ていると……

「……………笑った？」

不意に雄大さんが笑った気がした。表情に変化は無かった。なのに、どうしてそう感じたのだろう。

不思議に思っていると、唐突に打ち合いの音が止み、雄大さんとシグナム副隊長の距離が離れていた。

何度目かの剣筋を受け止め、強引に振り払う。

「くっ！」

この日初めて苦々しい声を発して彼女は後ろへと距離を取る。

その距離を確認して、俯いた状態でその場で直立する。頭の中に渦巻くのは起爆剤。昔に体験した魔術師との殺し合いの数々を思い出す。

殺しという行為を正当化する為に奴への憎しみで自分を満たす。身体のを全てをスイッチが入った時の自分に切り替える。

ただ、今回はあまりに露骨だとばれる可能性があるのです。しかし、この少しだけがいつも以上にきつかった。

爆発したがる起爆剤達^{にくしみ}が脳内で暴れに暴れ、気を抜くと理性が瓦解して一気にトリップしてしまいそうになる。

苦しいだけの麻薬をやっているようだ。際限なく脳内に表れ、騒ぎ、鎮圧されていく。その繰り返し。

その状態でシグナムに視線を向ける。全ての感覚が冷たく冷えきった中で彼女だけが唯一温かく映っている。

それがどうしようもなく気持ち悪い。バランスが悪すぎる。俺の身体はそれを修正しようとする。さて、頼むから殺されないでくれよ。

「……………っ!!」

俺の変容した雰囲気にはシグナムは視線に鋭さを増す。それを意に介さず俺は右手に持つナイフを投擲した。

「くっ！ レヴァンティン！」

P a n z e r g e i s t !

瞬間、シグナムの身体が淡い桃色の光を纏う。ナイフはそれに弾かれ、真上に放り出される。

「……………」

俺は既にその場から飛び出していた。位置するのはシグナムの真上。

「――……」

シグナムの上を後方宙返りの要領で飛び越えながら弾かれたナイフを掴み、シグナムの顔に突き出す。

しかし、それも桃色の光に阻まれ彼女の顔の前で静止する。

直ぐにナイフを引っ込め、物理法則に従い、彼女の後ろに背を向けて着地。地面に這うような姿勢のままささず身体を時計回りに回転させ、彼女の足を払いにかかる。

「うあっ！」

反応できなかったのか、足を綺麗に払われ一瞬宙に浮くシグナム。そして、俺はそのまま勢いを殺す事なく回り……

「三――！」

残った左足を飛び上がりながら彼女の横っ腹に叩きつけた。

桃色の光のせいでやたらと堅かったが、空中では踏ん張りようもな

いいし、手段はあっても不意のこれには反応できないだろう。

彼女はそのまま勢い良く瓦礫の山に激突した。

轟音を上げ、煙を上げる着弾点ならぬ着人点。俺はその間に息をゆつくり吐き、呼吸を整える。

しかし、彼女……最後の一撃を腕で防いでいた。反応ができなかった訳ではないらしい。

まあ、そこまで気が回ったのなら大丈夫だろう。取り敢えず喜んでるそぶりを見せる為に軽くガッツポーズ。

予想でしかないが、見学連中は呆然としているだろう。何せド新人が部隊の副隊長ぶっ飛ばしたんだから。

それにしても……えらく時間がかかるな。まさか、気絶したりしてないよな。いや、加減はしたから大丈夫だと思っけど……

「……レヴァンティン。カートリッジロード」

J a w o h n ! (了解!)

「……何今のガシャンって音。それにやたらとカッコいいそのドイツ語は何よ。無茶苦茶嫌な予感がするんですけど……」

いや、言いたい事は分かる。今まで本気出すとか、さんざカッコつけてたくせにいつものアホに戻るのが速いしあっさりし過ぎてるって言っただろ？

だがそれも仕方ない事である。およそ剣から聞こえるはずのない、何かがスライドするような音が聞こえてきたら、誰だってビビるに決まってる。俺は少なくともそう信じている。

Schlangeform!

一気に冷めた俺をよそに再び機械的なそのドイツ語が聞こえてきた瞬間……

「うわっ……!!」

何かが蛇のようにこちらに伸びてきた。真っ直ぐ伸びたそれを何とか避けるが、その伸びてきた何かは意思を持っているように俺の周りを回りだし、あっという間に俺を縛り上げた。

「これは……鞭？ 剣の鞭か」

「動くなよ。動けば、お前の身体がバラバラになる保証があるからな」

「嫌な保証だなオイ!？」

物騒な事を言うシグナムに思わずツツコム。

しかしまあ、終わりは意外と呆気なくと思ってはいたが、こうもあっさりしていると無性に悔しく思ってしまう。

「それで……どうする?」

「どうもこうも八方塞がり、詰み、降参だつて。こんなのどうしようもない」

俺は両手を上げ、降参だと自分の意思を示す。すると、俺にまわりついていた剣達がゆっくり俺から離れ、シグナムの元でもとの剣の形に戻った。

「はい、そこまで。二人ともお疲れさまでした」

なのは声が演習場に響く。まあ、当初の予定とはかなりずれたものの結果は同じなのだ。こんなものと言えばこんなものだろう。

「ありがとうございました。わざわざ俺の為に時間を割いてもらって」

「なに、主の命令とは言え私が進んでやった事だ。気にする必要もない」

そう言って、いつの間にか甲冑から管理局の制服に戻ったシグナムは俺の横を通り、もの言わず見学場所へと歩いていく。

その後を追うようにシグナムから二、三步ほど離れて俺もゆっくり歩いていった。

「お疲れさんや二人とも」

ビルの屋上に戻ると、八神からの労いの言葉に出迎えられる。

取り敢えずこれでやる事も終わり、少しはゆっくりできるだろうと思ったのも束の間。ナカジマを含めたフォワード部隊がわらわらと俺の周りに集まってくる。

「すごいですよ雄大さん！ シグナム副隊長と渡り合ったただけでなく、一撃当てるなんて！」

赤髪の少年が興奮したように俺に詰め寄ってくる。

「あゝ、まあ負けるのは分かってたしあんなのまぐれまぐれ」

「そうだとでもすごいです。魔法も無しにあそこまで動けるなんて」

「やろうと思えば君でも出来るよピンクのお嬢さん。あれはそこまで難しい事じゃない」

「いや、さすがにあそこまでは無理ですよ」

ナカジマが苦笑しながらそんな事を言う。……確かにそうか、欲を言うならあまり俺の動きを参考にして欲しくはないし、無責任に期待を持たせるのも良くない。

「そういえば、雄大さんは一応フォワードメンバーの一人なんですよね？」

「そうだよ。オレンジ頭」

「すごく不名誉な呼ばれ方なんですけどそれ」

オレンジ頭の少女はその呼び方が気に入らなかったのかジロリとこちらを睨んでくる。怖いなこの子。

「仕方ないだろう。名前知らないんだから。それに皆髪の色が鮮やかすぎて鮮やかすぎて……。その赤髪の子とナカジマの間にフェイト挟めば信号だぞ信号。頭で交通規制できるぞ。そんな特徴を呼び名に使わないのは勿体ないとは思わないかね。オレンジ頭君」

「調子乗ってると頭打ち抜きますよ」

「ちよっ……何、何なの君？ そんなにさらっと物騒な事何処で覚えて来たの？ あれか最近流行りのツンデレか君は」

「……クロスファイヤー……」

「ストップストオオップ！！ 悪かった。悪かったから何かその周りに出てるオレンジの弾丸っぱいのを消して下さい！ 年齢は違えど未来の同僚なんだよ！？ 夢膨らむ俺の将来の可能性を容赦なく叩き潰すつもりか！」

「安心して下さい。同僚じゃなくてライバルですから」

「若い芽は先に潰しておくてか！？ 年下の女の子にそんな事されるとは思ひもなかったよ！」

「ティ、ティア〜。取り敢えず落ち着こう、ね？」

躊躇なく銃を突き付けてきたオレンジ頭をナカジマが宥める。不満げな気持ちを拭いきれないのか、オレンジ頭は渋々ながらも銃を下げる。

「……ティアナです」

「イグアナ？」

「ティアナです。私の名前。ティアナ・ランスター。何ですかそのイグアナって……」

「此処に来てまさかのカルチャーショック!?」

どうやらこのランスターという少女。俺の発言を真面目に取るのが馬鹿らしくなってきたのだろう、軽くスルーして見せた。

いやはや人の成長は早いものである。

「あ、僕はエリオ・モンディアルです。よろしくお願いします雄大さん」

「モンブランね、覚えた覚えた」

「ち、違います! モンディアルです!」

ランスターの自己紹介に便乗して、赤髪の少年 モンディアルも名乗る。まあ、モンブランは自分でも強引だった気がする。

それにしても、最近はおケも担当するようになってきた俺。

「じ、じゃあ、私も……キャロ・ル・ルシエです。よろしくお願いします」

「ああ、よろしくルシエちゃん」

「キャラだけ普通！」

「馬鹿野郎モンブラン！　こんな純粹そつな子困らせるのは可哀想だろうが！！」

「普通に僕達に失礼ですよ！」

モンディアル　　思わぬツッコミ伏兵である。

「まあ、取り敢えずナカジマにランスタ―。モンディアル、ルシエだな。これから色々足引っ張るかもしれないけどよろしく頼むよ」

そう言つて軽く微笑む。さて、挨拶は済んだ。これからは彼女達と同期になるのだ。奴を見つけるまで……どれだけの時間があるかは分からないが、上手くやっていけるようにしよう。

「主はやて。少し宜しいですか？」

「ん？ シグナムでないしたん？」

模擬戦が終わり、フォワード陣に囲まれる高橋を見て、主にひっそりと話しかける。主は当然のように少し不思議な顔でこちらを見ている。仕方ない。いきなり神妙な面持ちで話しかけられれば誰だろうと不思議に思う。

（あまり大きな声で話せる事でもありませんので、ここからは念話でお願いできますか？）

（かまへんけど……どないしたんシグナム。まさか、どっか怪我したんか？）

（いえ、怪我はありません。吹き飛ばされた時は防御魔法で身を守っていましたから）

そう、私が伝えたい事はそんな事ではない。第一、怪我をしたなどと言えば主を心配させてしまう。わざわざ主に手間をかけさせては守護騎士の名折れと言うものだ。

（お伝えしたいのは高橋の事なのです）

（雄大君？ 雄大君がどないしたん）

そう聞かれて少し躊躇う。私もこの部隊の副隊長。これから共に戦う仲間としてはこんな事は言いたくない。

しかし、言わねばなるまい。もし……もし私の思った事が本当ならば高橋は何かとてつもない事を隠している可能性がある。それも周りに危機が及ぶほどの……だ。

（私が高橋に吹き飛ばされた時、あの時私は彼から尋常じゃない物を感じたのです）

（尋常じゃない……具体的にはどんな？）

（一言で言えば……殺気です）

（殺気？）

（はい。私の勘違いかもしれませんが、あの時私を襲った重圧は……丸で得体のしれない何かの口の中に入るようでした。気を抜けば、

飲み込まれて二度と戻ってこれないようなそんな感覚)

(続けて)

いつの間にか主の顔は真剣になっていた。顎に手を添え何かを見据えるような瞳でじっと考えを巡らせている。

(殺気と言うものにも種類があります。濁りがなければ何かを目的とした物、濁りがあればただおぞましい物。しかし、高橋のそれは……黒くおぞましいものであったのに何か悲しげなものを感じました)

(私は武道とかそんなのに詳しくはないから分かんけど……騎士の直感ってやつかな)

(はい。まあ、あくまで直感ですのであまり気になさる事もないでしょうが……高橋は少々危険な人物かもしれません。それを頭の隅にでも置いていただければと……)

私が伝えた内容に主は目を瞑り、深く考えている。しかし、それも束の間。直ぐに顔を上げる。

(あかんよシグナム。雄大君はこれから一緒に戦う仲間や。こつち

が信用したらんと、信用もしてもらえへんで)

(はい………すいません)

(まあ、実を言うとな私も雄大君は何か隠してるな〜とは思っとるよ。訓練校一ヶ月卒業なんてことをしとる時点で十二分に怪しいし、しかもそれがこっちの世界に来て半年も経ってない次元漂流者や。こんなもん裏があると思つて間違いはない)

(それでは、どうして……………)

(……………まるつきり勘なんやけどな。それは多分私達を何かに巻き込まんようにしてるんちゃうかと思うんよ。でも、雄大君が何を隠してるとは言え、私は雄大君を信じたい。それに信じとつたら何時か雄大君も話してくれるかもしれんやろ？ 正直、指揮官兼部隊長としてはあんまり誉められん考えやけど)

その主の言葉に私は思わず微笑む。

(………何笑つとるんよシグナム)

(いえ、主が何時もの優しい主で安心しました)

（何か含みのある笑いやね）

そう言つて、少し不機嫌になる主。主は何時も通り優しいお方だ。今日もそれは変わりないらしい。

なら私も主の意思通り、彼を信じてみるとしよう。彼が何を隠しているとも、彼の口から話される日までそれを待ってみよう。

そうして、ふと高橋の方を見る。高橋は何故かティアナに銃を突き付けられ、必死に謝罪している。

丸で別人だと高橋を見ながら妙に可笑しくなつて頬を緩ませる。

見上げた空は何処までも澄んでいて、限りなく遠くを見渡せた。それはこれからの行く先を暗示しているようで、この空を曇らせる事がないように私は此処で精一杯の事をする人知れず心の内で誓つたのだつた。

ファーストアラート（前編）

この始め方は何度目になるのか……あれからまた約二週間が経った。

俺は語り手としては余りにお粗末らしい。毎度毎度こんな切り口でしか語り始める事が出来ない。

でも、仕方がないだろう。今に至るまでこれと言った出来事がなかったのだから。語るべき何かがない限り、俺は何にも出来ないのがある。うん、つまり俺じゃなくそという話題を提供しない世界が悪い。

自分で思っておいて何だがずいぶんとスケールのかい責任転嫁である。本当、人間って小さいですね

……………一先ず自分でも何言ってるか分からない愚痴はここまでに
して、今俺が何をしているかと言えば……

「はい、整列！」

演習場に響くなのはの声に俺を含む五人

通称フォワードメンバ

ーは全員が肩で息をしながら横に一直列に並ぶ。

俺達は今朝訓練の真っ最中だ。基本的に俺達フォワードメンバーは朝、昼、夜と一日中訓練漬けの毎日を送っているので、今は一日の始まり部分をちょうど過ごしている事になる。

しかし、この訓練の密度はかなり濃い。朝からこなすにはかなりの運動量で内容も一日の始まりとは思えないほどハードな物だ。

俺はやっていた事がやってた事だけに体力にはそれなりの自信があった。だが、今の俺は完全に息が上がっている。

俺が元来持久力がないだけかもしれないという非常に傷つく見解を除けば、この訓練のきつさが十二分に分かってもらえるだろう。

「今日の早朝訓練ラスト一本。皆、まだ頑張れる？」

「「「「「はい！」「」「」「」

「じゃあ、弾丸回避訓練^{シューティング}をやるよ。レイジングハート」

All right・Accel Shooter

なのはの左手にある杖型のデバイス　レイジングハートから機械的な女性の声が聞こえると同時に宙に浮いているなのはの足元に魔方阵が浮かび上がる。

それが淡く光りだしたと思うと、彼女の周りに無数の桜色の弾丸が現れ、まるで各々が意思を持つかのようになのはの周りを高速で飛び交い始めた。

「私の攻撃を五分間被弾なしで回避し切るか、私にクリーンヒットを入れればクリア。誰か一人でも被弾したらまた最初からやり直しだからね。頑張っていこう！」

要は当たらずに一発入れればクリアと言う事か。単純そうに見えてその実かなり難しいものだ。

何せあの弾丸　アクセルシューターと呼ばれる魔法は発動者の思いのままに軌道を変更できる。

もちろん、その操作にはかなりの集中力が必要なのだが、やろうと思えば対象を追尾し続ける事だって可能という何とも面倒くさい魔法なのだ。

更になのはに限らず、魔導師はほぼ全員が防御魔法を習得している。例えばアクセルの雨を抜けたとしても、単調な攻撃ではあっさりと防がれてしまう。

更に更にもう一つ。

これはなのではなく俺達に関する事だが……

「こんなボロボロ状態でなのはさんの攻撃を五分間……捌き切る自信ある？」

「ない！」

「同じくです！」

ランスターの問いかけにナカジマとモンディアルが自信満々にそう答える。

「雄大さんは？」

「無理だ……さすがに今の状態じゃあな」

出来ない事はない。しかし、それは成功する確率で言えば半分にも満たない分の悪い賭けだ。

そんな不安定要素を残すぐらいなら、意地も何も切り捨ててすっぱりとこう言っべきだろう。ナカジマもモンディアルもそう思ったからこそその言葉だろう。

そうでなければ只の腰抜けである。

「じゃあ、何とか一発入れよう！」

「はい！」

ランスターの方針にルシエがはつきりと返事をする。俺達もその方針に異論はない。

ランスターはこの中ではかなり頭の回る方だ。彼女は射撃や狙撃を主とする遠距離型のポジションという事もあり、全体的な把握能力とそれに付随する判断速度が異様に高い。

機動六課が設立してから約二週間続いた訓練の中で、彼女は持ち前の才能とも呼べる力でフォワード部隊の指揮官的存在になりつ

つある。

そんな彼女が決めた方針だ。俺達の中に異論を唱える者はいないだろう。

まあ、この方針に穴があると言えばあるのだが……曲がりなりにもこれは訓練だ。その多少の選択ミスをする事自体もいい経験になるに違いない。

「行くよ！ エリオ！ 雄大さん！」

「はい、スバルさん！」

「ま……足手まといにならないように努力させてもらっよ」

そう言つて前衛型のナカジマ、モンディアル、俺はそれぞれの武器を構える。

ナカジマは右手にはめられたグローブ型のデバイスリボルバーナックルを。

モンディアルは槍に酷似した長柄のデバイストラダを。

そして、俺は何時ものように何の変哲もないナイフを。

「準備はOKだね。それじゃあ……」

なのはが右手を振り上げる。瞬間、緊張が身体中を駆け巡った。俺達は全員視線を鋭くし、握っている手に力を込める。

「レディー……ゴー!!」

そして、そんな緊張が解ける間もなく、合図と一緒になのはの右腕が振り下ろされ、桜色の弾丸が容赦なく俺達に襲いかかった。

「つゝかゝれゝゝたゝゝ」

「そうですね。今日は一段とハードでした」

そして、時は過ぎる。何だか語るべき所をえらくぶっ飛ばしている気がしないでもないが、そこは何か良く分からん事情を皆さんの広

い心で差し障りなく解釈してもらいたい。はい。

まあ、簡潔に言えば早朝訓練のラスト一本を二週間ほどでそれっぽくなってきたチームワークで何とかクリアし、休憩も兼ねて只今フオワードメンバーはシャワーを浴びて一段落中である。

そして、俺とモンディアルは早々にシャワーを浴び、階段で未だにシャワーを浴びているであろう女性陣を待っている訳だ。

因みに先の台詞。最初に子供が駄々をこねるように情けなく弱音を吐いているのが俺で、それにしつかり受け答えしているのがモンディアルである。

「それにしても…… 実戦用のデバイスに切り替えなんて今から楽しみですね！」

「あゝ、そうだね。楽しみだね」

モンディアルが言ったのは今朝の訓練でなのは言い出した事だ。

あの訓練の後、ナカジマが何時も移動に使っているローラーブーツがオーバーヒートを起こし、更にはランスターのアンカーガンとやらもかなり厳しい状態である事をきっかけに、訓練に慣れてきた事も考慮して実戦用の新デバイスに切り替えるとの事だった。

それは楽しみに違いない。実戦用に切り替えるという事はこれまで以上に強くなれ、自分達自身の成長の証でもあるのだから。

しかし……

「あの……もしかしなくても自分だけデバイスを持ってないから不機嫌になつて……なんて事ありませんよね」

「よく、分かってんじゃないかねえかモンブラン。なら、お前のストライダ俺によこせ」

「な、何言ってるんですか！？ それに雄大さんはナイフ使いじゃないですか」

「いや、今の俺ならいける気がする。あまりの理不尽さに俺の眠っている才能がピキーンと覚醒した気がする。うん、絶対そうだ。そうに違いない」

「いや、仮にそうだとしても嫌ですよ」

「というわけですね」

「会話する気あります!?!」

とまあ、自分のツツコミ要因としての立場を忘れ、完全にボケの立場に立っている訳だが……

最近ではこんな会話も割と普通になってきている。他愛もない馬鹿な事で笑い合えるそんな普通の会話。

それは俺が心の底で望んでいた事なのかもしれない。いや、現実になんてそうなのだろう。

けれど、それは同時に俺の本質を悟られたくないが為の行動でもある。前にも言ったが、俺は被害者ぶって自分を正当化して生きてきた人間だ。

自分のやる事は被害者としての特権である。どんなに酷い事も被害者である俺の気持ちを考えれば仕方のない事である。

そつやって平然と力だけを求めるなんていう蛮行を続けてきた。自己中の塊みたいな存在。

しかし、他人にはそれを知られたくない。

要は意固地になっているだけだ。俺は基本アホで間違っている道でも感情の傾くがままに突っ走る。そんなみつともない姿を見せたくないだけの子供そのものである。

「冗談だよ冗談。まあ、俺みたいなド素人がポンポン次の段階に登っていけるとも思っていないし」

「そう言ってもらえて助かります本当に。……それにしても遅いな……皆」

「女性はこのいう時には時間がかかるんだよ。風呂、身仕度、買い物。女性が時間かける事柄ベスト3だ。テストに出るからよく覚えとけよ」

「はい」

まあ、基本アホなのは今の俺でも変わらない。むしろ、アホという言葉をしつかり言葉通り受け取るのであればこちらの方が重症なのかもしれない。

そうして待つこと数十分。女性陣がようやく姿を現した。全員が管理局の制服に身を包み、さっぱりとした顔で隊舎のロビーに向かう。

「そついえば雄大さん」

「ん？ 何でございましょうか」

軽く談笑しながら隊舎の中を歩く途中、ランスターが唐突に俺に何か聞いたそつに声をかけてくる。

「あの……大した事じゃないんですけど、雄大さんナイフ使いますよね」

「使うね」

「ナイフを使う理由とかって……あるんですか？」

「理由？」

まさか、そんな事を聞かれるとは思わなかった。確かに大した事ではないがそれを聞くタイミングは今この場でなきゃならないのだろうか。

「はい。私やスバルは訓練校に入る前から独自の戦い方が既に確立してましたから、デバイスもオリジナルなんですけど……そういうオリジナルの戦い方を確立してる人の中で、ナイフを使う人なんていうのは聞いた事もないですし、ちょっと気になって」

「まあ、オリジナルのデバイスなんて持つてる人が少ないからっていう理由もあるんですけどね」

ランスターの言葉にナカジマが間延びした声で補足する。なるほど、その理由なら頷けるか……

「まあ、理由なんて大層な物はないけど……強いて言えばルシエちゃんと同じかな」

「私ですか？」

「おう。ルシエちゃんの家系は竜召喚師っていう特殊な魔法を使う家系なんだろ？」

「はいそうです。家系と言うよりは一族っていう単位ですけど」

ルシエちゃんはそれが何かというように小首をかしげる。ルシエちゃんは今出てきたみたいに竜召喚師という少し変わった魔法の使い手なのだが……その事はまた後で。

「つまりは昔から伝えられた伝統ってこと。ルシエちゃんの竜召喚みたいに俺の家系には昔から受け継がれ続けている武術……みたいな物がある。その主体がナイフ 短刀ってだけの理由だよ」

「そうなんですか……」

それを聞くなりランスターは何処か塞いだような雰囲気で見線を落とす。

「えーと……今の答えじゃ不満？」

「いえ、ただ少し私が期待し過ぎてだけですから」

「つまり不満なんでしょ！？ 何でそんな遠回しに言うの！ ルシエちゃん！ ランスターさんが何か怖いです！ 助けて!!」

「えっ？ えっ！？ えっと……あの……」

「雄大さん。キャ口を巻き込んだじゃ可哀想ですって。ティアゝ何怒ってんの」

「……別に怒ってないわよ」

言葉とは裏腹にますます不機嫌になっていくランスター。えっ……何？ 俺、マジで何かした？

ランスターは不機嫌そうなままさっさと歩いていく。

それをナカジマが走って追いかけていった。

その様子を俺はその場で立ち尽くしたまま見送り、口を開く。

「ルシエちゃんルシエちゃん。俺何か悪い事したかな？ 女の子目線からの意見をお願いします」

「えっと……雄大さんの言葉のイントネーションが嫌だった……とか？」

「どうしようもねえよ！ 全否定じゃん！-」

何だか妙に真実味のあるその意見にむなしくもそうツツコムしか出来ない俺だった。

「ティア〜、待ってよ〜」

スバルの声が耳に入ってくる。普段なら立ち止まって、待ってやるぐらいの事はするのに今は何だかそんな気になれなかった。

「何よ。さっさと行くわよ」

「ねえ、何でそんな怒ってるの?」

「……怒ってないわよ」

「嘘。絶対怒ってる」

「何でアンタにそんな事分かるのよ」

「分かるよ。だって、訓練校時代からずっとコンビ組んできたんだもん」

スバルは私の言葉に迷う事無くそう答え、私の顔をじっと見つめていた。

こういう時のスバルは苦手だ。決まって私が隠し事をすれば、こうやって何かを見抜こうと真っ直ぐ視線を向けてくる。

それに何時も私は負けて最終的には本音を吐いてしまうのだ。

「理由が……無かったのよ」

「……理由？」

それは今回も変わらなかった。そのスバルの純粋な視線に思わず口を開いてしまう。

「……雄大さんの動きを見て何時も漠然と感じてた。あの動きは私達に真似出来る物なんかじゃない。真似しちやいけない物なんだって……」

そこまで言って後ろを少し振り替える。こんな話を本人に聞かれ
ば色々と恥ずかしい。そう思って雄大さんの位置をさりげなく確認
した。

雄大さんはエリオとキャロと何か話しながら、何時もの様に時折大
声で叫んでいる。

その様子に少々安心し、戸惑いながらも続きを口にする。

「でも……何でそう思ったのか自分でも分からない。だから、雄大
さんにナイフを使う理由を聞いた。きつと、そこに私が思うよう
うになった原因があるんだって期待して……だけど、実際は何も無
かった。それが腹立たしくてたまらないのよ……こっちは真剣に考
えてたのに本人は何時もの様におちゃらけて　　！」

最初に口を開けば、後は止まらなかった。まるで決壊したダムから
次々と水が溢れる様に言葉が湧き出てくる。

「えと……つまりティアはその理由があって欲しかったって事？」

「あって欲しかったって訳じゃないけど……」

「でもさティア。どうしてそんなに雄大さんの事が気になるの？」

「えっ ？」

スバルのその言葉に私は思わず惚けた声を出してしまう。

「……何言ってるのよ。私はただ自分の考えがはつきりしなかったのが嫌だっただけで……」

「うん。だからさ、何で雄大さんの事をそんなに考えるの？」

そこでスバルの言わんとする所が分かった。そうだ……私はどうしてあの人の事を考えて腹なんか立てているのだろう。

もし、私の先の言葉通りなら別に対象は雄大さんではなくエリオやキャロに対してもそうでなくてはならないはずだ。

まだあの二人の事を全て知っている訳ではない。むしろ知らない事の方が多い。

だと言うのに、何故あの二人には今の様にイラついたりしないのだろう。

よくよく考えればさっき何故雄大さんが離れていて安心したのか……

本人にこの話を聞かれると何故恥ずかしいのか。

気が付いたのは矛盾。

自分の考えをはっきりさせたいなら、強引にでも聞き出せばいい。
けれど私はそれをしたくない。

プライド
自尊心が許さないから？ 理解もしてない彼の事情に同情している
から？

違う 違う。そんな簡単な感情じゃない。もっと言葉では言い表
わせない様なむしゃくしゃした思い。それが私を邪魔しているのだ。

「別に……仮にもこれから一緒にやっていく仲間なんだし、知りた
くなるのも当然でしょ」

「ふん……取り敢えずさ、後でちゃんと仲直りしとかないとね」

「……そうね」

スバルの言葉に何とも煮え切らない返事をして歩調を早める。ただ私はいち早くこの場から逃げ出したかった。ただあの人と顔を合わせたくなかった。

私が何で雄大さんの事を考えていたのかは分からないけれど、こんな話は間違いなく恥ずかしい話だ。それだけは混乱している頭でも理解出来た。

私は今どんな顔をしているのだろう。

そんな自分でもよく分からない事を考えながら私は先を急いだ。

ファーストアラート（後編）

その後、何とも納得出来ない気持ちのまま六課のロビーに集合。そして、そこで待っていたなのはに連れられ俺達は一路メンテナンスルームへと移動した。

メンテナンスルームは主にデバイスの管理、調整を行う部屋でそこではデバイスを専門としたメカニクススタッフが昼夜を問わず設計、開発、研究と日々忙しく働いている。

隊長陣や前線メンバーのデバイスは個人で調整したりする事も勿論可能であるが、やはり細かい部分までとなると専門的な知識や技術が必要となってくる。

更に言えばデバイスは人工知能を搭載したインテリジェントデバイスに始まり、人工知能を搭載せず処理速度の速さを主とするストレージデバイス、ベルカ式のアームデバイス、融合型デバイス等種類も様々。

必然的に必要となる知識も増えるため個人の調整では限界があるのだ。

そこでデバイスの調整を主とするメカニクススタッフ 通称デバイスマイスター達の出番となる訳である。

という事で、“俺”を除くフォワードメンバーの実戦用デバイスを
受け取る為にここに来た訳だが、はつきり言おう暇である。

そりゃそうだろう。こっちはデバイスなんてものを所持してない上
に、欲しがった所でそうほいほいと作れる物でもない。

説明を軽く聞いているものの、デバイスに関しては話を聞く限り
俺にはあまり必要のない知識である。

確かにこの世界の魔法ちからを制御する点において重要な要因ファクターであるのは
否定できないが、それ自体は何の事はないただの機械なのだから。

そんな半ばふてくされた気持ちで、他の四人がメカニックスタッフ
のシャリオ・フィニーノ　愛称シャリーの説明を受けているの
を少し離れた場所で壁にもたれかかりながら見ている。

そのまましばらく経つと不意に何かがフォワードメンバーの元に飛
んでいった。

その正体は青い髪に管理局の制服を来た人形みたいな小さな人型。
赤いチビすけヴィータに続く超人家族八神家の一員その二ことリイ
ンフォース？（ツヴァイ）空曹長である。

何であんなちっこい人が普通に喋って浮いているかと言うと、実は彼女ああ見えてデバイスの一種であるそうなの。

ベルカ式の融合型デバイス。詳しい事は分からないがそういう事らしい。

デバイスだと言っても、やる事なす事は全て人間と同じだし、あの姿も魔力の浪費を抑える為の省エネ状態のような物とのこと。

省エネどころかほとんどエネルギー使っていないのではないかと言いたくなるが、その身を削ったの省エネ精神は昨今の人類に欠けている物だと俺は思う。

言うなれば彼女は人類が忘れかけている節約の心そのもの。あれだ節約妖精だな、うん。

妖精と言う以上、その姿はすこぶる愛らしい訳であって更には夢を見せてくれるような存在である訳だ。

それは万人が頷くであろう妖精へのイメージであり、そのイメージは老若男女に精通する普遍の真実と言っても過言ではない。

そして、その憧れともとれる妖精へのイメージは人として生まれた

俺達にさらなる夢を見せ、際限なく魅了する。

加速する甘美な夢に徐々に自己の崩壊が始まる。理性は瓦解し、常識は砕かれ、恐怖は意義を無くす。

自分を抑えられず、その身体はうち振るえ、今この瞬間を持って全てを吐きださんと脈動する。

つまり、何が言いたいかと言うと……

「今日こそお前の身体に着いてる粉を浴びて、大空に羽ばたいてやるぞティンカーベルウウウウウー!!」

「だからリンはティンカーベルじゃないですー!」

俺はリンフォースをこの上なく愛していると言っ事である。

「ねえ? 雄大君」

「はい、なんでしょうなのはさん」

「いつも言ってるよね？ リイン曹長を見るなり抱き寄せようとしていないように って」

「はい」

なのはにバインドという拘束魔法をかけられ、そんなに広くないメ
ンテナンスルームで正座をさせられ、真上から思い切り冷たい視線
を浴びせられているのは、間違いなくこの僕 高橋雄大三等陸士
です。

今の流れについて来れた人はごく少数だと思うので、この場を借り
てご説明させて頂くと……

まず、俺はリインフォースをこの上なく愛しています。好きとか嫌
いとか恋愛感情とかでなく愛しています。

その為にリインフォースを見た瞬間、俺の愛のボルテージがメータ
ーを振り切ってしまった為に俺暴走状態に移行。

焦るフォワードメンバー達、逃げ惑うリインフォース、啞然とするフィニーノ。

そんな所に我らがエースオブエース高町なのはさん登場。

暴走した俺をバインドで縛り上げ、鎮静剤（頭への本気一歩手前の衝撃）を打ち、今に至る。

「いつも言ってるにも関わらず……何で毎回同じような事になるのかな？」

「それはその……愛の為せる所業と言うか、子供の頃から追いつけた夢への渴望の結果と言うか……」

「何にせよ反省はしてないんだよね？」

「反省してなかったら未だに暴れてますよ……」

こんな八方塞がりな状態に身から出た錆とは言え、情けなくも首を縦に降る事しか出来ない俺の姿は自分でも別人のように思えてくる。

この世界に来る前に殺し合いなんてしていた人物と同一存在だとは

誰も思わないだろう。

逆に言えば、それだけ日常に溶け込む事は出来ている証明にもなるのだが……これを日常と呼ぶには些かどころか素晴らしく抵抗がある。

「うー、怖かったですー」

「大丈夫ですか？ リインさん」

安心しながらも、何処か疲れたような顔でため息をつくリインフォースをルシエちゃんがやんわりと氣遣っているのを横目に見ながら、俺はただひたすらに頭を垂れ続けた。

「えっと……そ、そうだ！ 実は今日は雄大さんにもプレゼントがあっただですよ！」

そんな微妙な空気に耐えきれなかったのか、フィニーノが何とかこの状況を打開しようといつも以上に声を張り上げてそんな事を言った。

「プレゼント？」

その言葉に俺は単純に疑問を抱く。今このタイミングで出てくるプレゼント等どう考えても思い付きはしない。

「はい！ だからのはさんも取り敢えず抑えて抑えて……」

「駄目だよシャーリー。雄大君は早めに叱つとかないと何が悪かったのか分からなくなるから」

「そこまで子供じゃねえよ！！」

それでも尚引き下がる気配のないのはさん。フォワードメンバーなんてさっきから部屋の端の方に退避してる始末。

もう泣きたくなってきた。

「じ、じゃあそのままの体勢でお披露目と言っ事で……」

「どう考えたってプレゼント受け取る姿勢じゃねえよ！ よくこのまま事を進められるな！」

「……じゃあお披露目です」

「無視してんじゃないよフィニーノさん。あれか？　こんな訳分からん奴は相手するからます話がずれるのであって、それならこっちで勝手に話を進めた方が楽だと言う結論に至った拳げ句のガン無視ですか？　いいの？　そっちがその気なら俺とことんまで喋り続けるよ？　一週間ぐらい俺の声聞きたくなくなるぐらいに深層心理^{ナル}に刻みこんじゃうよ？」

そんなうざいとは思えない行動を続ける俺だったが、突然顎下に見覚えのある赤い球体をあしらった杖が突き付けられる。

「雄大君？」

「すいません！　なのはさん！　何でもしますから！　何でもしますから、今の行動は見逃して下さい！　今は反省してないからとかでなく、俺の……俺の本能なんです！　そろそろ俺もいい歳だからこういうキヤラは卒業したいよ。したいけれども、長年かけて身体に染み付いた本能はどうしようもないんですううう！！！」

もういい加減に直ぐ頭下げるのを止めろよ俺。と自分で自分を諫めるもののそれには全くもって意味はなし。この世界に来て何度目かも分からない安い頭を情けなく下げるのだった。

「はぁ……もういいよ。何でも私の言うことを一回聞いてくれる権

利ももらった訳だし。これ以上やっていると話が進まないしね」

俺のそんな様子になのはがため息をつきながらそう言つと、俺を縛っていた桜色のバンドが溶けるように消える。

それと同時になのはのレイジングハートも待機状態の宝石に戻った。

「取り敢えず……終了でいいですか？」

「うん。取り敢えず……ね」

「ご迷惑おかけしました皆さん」

フィニーノの言葉に何やらものすごく含みのある答えを返すのはだったが、それを言えばせっかく落ち着いた状況をまた蒸し返す事になるので素直に謝る。

「じゃあ改めまして雄大さんへのプレゼントのお披露目です」

フィニーノがそう言つて、何処からか両手にちょうど収まるサイズの長方形の箱を取り出す。

蓋を取り、中身を見た瞬間

身体が震えた。

「これって……ナイフですね」

中身を見たエリオが口を開く。

そう中身はナイフだった。黒塗りの鞘。柄には銀の細工があしらわれ、先端には真紅の水晶が埋め込まれている。

「ただのナイフじゃないんですよ。実はこれ……こう見えてデバイスなんです」

「これ……デバイスなんですか？」

フィニーノの言葉にランスターが驚いたように口を開く。

「そう。雄大さんは何時もナイフが主武装だからそのタイプのデバイスを作ろうと思って苦労に苦労を重ねた結果完成した一品。ただ

サイズの関係もあってカートリッジは最大装填数三発までなんだけどね」

フィニーノの言葉を聞きながら、自然とナイフ型のデバイスを手に取り。鞘を抜くとそこには銀ではなく、真っ黒にそまった刃が光に反応して鈍く輝いている。

柄を一、二度握り直す。刃の腹をなぞる。水晶を光に透かす。

そして、また身体が震えた。

間違いない俺は既にこれを“知っている”。

「フィニーノ……これ何処で手に入れた」

「えっ？ 何処でって……作ったのは私達メンテスタッフですから何処でと言われても」

「なら、質問を変える。これの“元”になった物は何処で手に入れた」

困ったように言い淀むフィニーノを見て確信する。

「俺のだ……」

俺の呟きに全員が驚いたような顔をする。それにかまわず俺は続ける。

「このナイフ……俺のなんだよ」

そう、このナイフ型のデバイスはかつて俺が所持していた物なのだ。

最初は何かの見間違いかと思ったが、身体は直ぐに反応していた。それに刃が黒いナイフ等これぐらいしかない。

最後に使ったのはあの時。奴とあちらの世界で殺し合った時だ。

あの時、俺はこれを地面に放りっぱなしにしてあつたはずなのに何故……

「えっと……前にデバイスの予備パーツを保管してある倉庫を漁ってたたら、そのナイフが知らない間に紛れてて……それを見たから雄大さんのデバイスを作ろうと思い立ったんですけど、あっ、ちゃんと許可は取りましたよ！ 決して無断で刃物を隠して改造してた訳

「じゃないですから」

フィニーノの説明にこれが俺の手に渡る経緯は分かった。しかし、どうやってこいつは世界と世界の次元を越えてきたのか。

その辺りがどうもすっきりしない。考えようのない事だから仕方ないのかもしれないが……

「いや、まあ責めてる訳じゃないし、ただこいつがあつた事に驚いただけだから……」

そう言いつつ刃を鞘に収める。黒く光っていたそいつはその輝きが嘘のように元の黒いだけのナイフに戻る。

「あのシャーリーさん」

「ん？ 何？」

そんな何とも言えない雰囲気の中ナカジマが口を開く。

「私達のデバイスは
待機状態で持ち運びしやすい形になってますけど、このデバイスは

さつきからずっとこの状態のままですよ。私達みたいにペンダントとかにはなったりしないんですか？」

ナカジマの言葉にフィニーノが首をひねる。

「うーん、それがね。デバイスの待機状態の機能も入れようとしたんだけど、デバイスの基本的な機能とカートリッジシステムを組み込んだ時点でちょっとおかしくなっちゃって……」

「おかしくなった？」

ランスターが聞き返す。

「うん。最低限の機能を付属させた瞬間、システムを組み込む系統の操作が全てエラーになっちゃって……」

長い間デバイスに関わってきたけど初めての事だよ、とフィニーノは苦笑いする。

「まあ、最低限機能すれば十分だよ。ありがとう、フィニーノ」

「いえいえ、じゃあ使い方の説明を」

そう言つて、フィニーノがモニターを操作し始めようとした瞬間だった。

まるで馬のいななきの如く甲高い音が施設内に響き始めた。その音に呼応するかのように部屋にある無数のモニターが赤に染まる。

その赤の中央に大きく鎮座する『ALERT』の文字。

「このアラートは……！」

「一級警戒体制！」

ナカジマとモンディアルの言葉に全員が真剣な眼差しでモニターを見つめる。

「グリフィス君……！」

なのはの言葉に応え、モニターの一つに眼鏡をかけた水色の髪が特徴的な青年が映る。

この男　グリフィス・ロウランは部隊の副部隊長を努めるエリート管理局員だ。フォワード陣や各隊の隊長、副隊長がほとんど女性で何かと女性比率の高い機動六課において、数少ない重要ポストについている男性である。

全くの余談だが、六課内の男性の比率が低い事も相まって、ロウランとは直ぐに打ち解ける事が出来た。

さすがに何でも話し合えるなんていう仲ではないが、普通の友人としては何の差し支えもないだろう。

そんな事を考えている間に、モニターにはフェイトとはやての顔も映っている。

話を聞かざり分かった事は、機動六課の直接的な理由である探索中の古代遺失物　ロストログア『レリック』らしき物が見つかった事。

さらにそのレリックはリニアレールに積まれており、レリックに引かれ、何処からか表れる戦闘マシン『ガジェット』がそのリニアレールを占拠しているという事。

レリックやガジェットの事は俺も管理局に入ってから知ったが、そ

の用途や製造元、ガジェットの目的は未だ解明されていないらしい。

はつきりしているのはレリックは放置出来ない危険性を秘めた物であり、ガジェットは管理局以外にそんな危険物を回収しようとしている部外者及び集団の刺客であるという事。

そして、その部外者が奴である可能性は捨てきれない。

なら、俺の成すべき事は簡単だ。

管理局員としてレリックの回収や探索に参加する。そして、奴がその裏にいるのなら居場所を見付け、炙り出し、今度こそ殺す。

たったそれだけの至極単純な行動。

それにもし奴がこの世界にいないとしても、この件に関わっていれば、俺はこの世界の魔法を新たな力として蓄えられる。

何にせよマイナスには転ばない。だったら、俺は俺で最善を尽くさせてもらおう。

『ほんなら……機動六課フォワード陣出動!』

モニター越しのはやての言葉に全員が返事をして、各々自分のデバイスを引つ掴み部屋を後にする。

「あつ、雄大さん!」

「ん?」

俺もこの世界の形に変化した自らの愛器を持ち、部屋を後にしようとした時、フィニーノに呼び止められる。

「これどうぞ。そのデバイスは形が変えられないですけど、これから何時も携帯出来ます」

そう言つて、フィニーノが渡してきたのはナイフをしまう事が出来るホルダーだった。ベルトに装着出来る型で銀の止め金がストラップのように揺れている。

「おお……これはありがたいありがたい。さっそく使わせて貰いますよ」

軽い感じでそう答え、ホルダーを受け取り、ベルトに装着してからナイフをそのホルダーに固定する。

「うし、じゃあ初出勤張り切って行きますか」

自身を鼓舞する意味も込めて両手で頬を叩き、真新しい愛器と共に部屋を急いで後にした。

初任務（前書き）

とても遅くなりました。これから亀更新が予想されますがどうぞよろしくです。

なんだか最近ちゃんと自分のレベルの低さを認識できた気がする（汗）

初任務

緊急アラートが鳴り響き、六課の前線メンバーがヘリで出発してから約三十分。

揺れるヘリの中でフォワードメンバーは新しい自分のデバイスを思い思いに見つめていた。

まあ、当たり前といえば当たり前なのだろう。何せこれから共に闘っていく相棒みたいなものなのだから。

しかも、フォワードメンバーに渡されたデバイスはどれもが人工知能――AIを搭載し、おまけに最新技術の結晶ときたもんである。

なまじ会話ができるような高性能機械。そんなものを与えられたら、誰だろうと感慨深いものがあるにきまっている。

フォワードメンバーのそれぞれの心持ちがどんなものなのか。それを正確に推し量る事は出来ないが、それぞれが任務に対する緊張感を感じていることだけは先ほどの沈黙で容易に察する事が出来た。

>初めまして。私は型番X - 5771、近代ベルカ式アームドデ

バイスです。あなたのお名前を登録してください<

そんな中響き渡るひどく無機質な声は、誰が聞いてもひどく違和感を覚えるものだった。

そんな空気を読めていない感満載な中、俺はいたたまれない気持ちになりながら返事を返す。

「高橋雄大。これでいいのか？」

> 高橋雄大……………登録完了致しました。これからよろしくお願
します、My load。マイロード私のシステムについてのご説明は必要で
すか？<

俺はただいまバイスの初期設定中である。

いたたまれない気持ちになりながらも俺がこの無機質な声に数分前から逐一返事を返しているのはそういう理由なのである。

念願のデバイスを手に入れたものの、すぐ使える状態にしておかなければ何の意味もない。

初期設定せず、デバイス使えなくて手傷を負ってでもみる。いい笑い者である。

まあ、そんな訳で……この沈黙の中、俺と俺のデバイスの声だけが聞こえるという元の世界の一般人が見ればイタイ事この上ない光景が広がっているのであった。

はい、状況説明終了。

「いいよ。お前がデバイスとして目覚めたのは最近だが、それまでは何年も一緒にいたからな」

>分かりました。それでは私の名称を決定して下さい<

「名前ねえ……それって絶対？」

>ロードの御心のままに<

「あ……今、思い付かないからさ、いい名前思い付いたら後でつけさせてもらうわ。それまでは仮としてアルファで我慢してくれ」

>了解しました。仮名称『アルファ』登録致します<

とりあえずこれで終わりか……と、軽く息を吐いてアルファ（仮）をホルダーにしまう。

やることなく、手持ちぶさたになったので何の気なしに右を見ると……

「……………」

「……何か用か？」

モンディアルが俺の右腰にあるデバイスを凝視していた。

「い、いえ！？ 何でもありません！！」

「嘘つけ。何か気になるからこっち見てたんだろ。別に怒りやしねえから言ってみろよ」

じ、じゃあ……とモンディアルは言いにくそうにしながらも口を開く。

「あの……どうしてデバイスの名前を今決めないんですか？」

「……モンディアル。お前、自分のデバイスの名前決める時、長い時間悩んだ？」

俺の諭すような口調に面食らいながらも、モンディアルは答える。

「もちろんです。これから任務を共にする相棒ですし、長い付き合いになるのは確実ですから……」

「そついうことだよ」

「……？　と言いますと？」

モンディアルは全然理解できないと難しい顔をする。

「つまり、これから長い付き合いになる相棒の名前を簡単には決められんってこと。ましてや、これから六課での初任務になるわけだ。小さい事でも、思考の妨げになるような事は出来るだけ取り除いておくほうがいいだろ」

俺の意見にモンディアルが感心したように頷いた。なまじ的を射ているからか我ながら妙に説得力のある発言である。

「まあ、カッコいい名前を考えたいのが本音だけだな」

「その発言で今までの全てが台無しだよ雄大君」

高町の呆れたような物言いが耳に痛い。別にいいだろ男の性^{さが}だつての、男の。

とか下らない事を考えてると、ヘリのモニターからオペレーターの声が慌ただしく聞こえ始めた。どうやら、目的地に近づいてきたらしい。

現在の状況を説明するところだ。

レリックを積んでいると思われるリニアレールは依然として走行中。車両のコントロールは内部にいるガジェットが完全に掌握し、コントロールを奪い返すには直接リニアレール内部の制御室で操作をするしかない。

加えて間の悪いことにガジェットの増援がリニア付近の上空に出現。ガジェット？型と呼ばれるその航空タイプのせいでヘリが降下ポイントに到達できないという何とも厄介な状況である。（因みにリニ

ア内にいるガジェットはガジェット？型と呼ばれているタイプらしい……詳しくは知らんけど）

この状況の打開には、いの一番に制空権を確保する必要がある。しかし、フォワードメンバーは皆陸上での戦闘が主で、誰も飛行魔法は扱えない。

厳密に言えば、ナカジマと俺は全く空中戦闘ができない訳ではないのだが……まあ、その話は保留で。

そうなると必然的に役割が回ってくる人は限られてくる訳で……

「ヴァイス君、私も出るよ。フェイト隊長と一緒に空を押さえる」

高町が必然と名乗り出た。因みにヴァイス君というのはこのヘリのパイロットを勤める青年ヴァイス・グランセニックのことである。

彼もまた六課の数少ない男性メンバーの一人である。

数少ない男性メンバーと言うこともあり、ロウランと同様すぐに打ち解けることが出来たメンバーの一人である。

まあ、俺達男性陣の事は取り敢えず置いておく。俺を含めて野郎の事を詳しく喋るんなら、全くもって華がない。需要も限りなくゼロに近いだろう。

「うつす、なのはさん。お願いします！」

> Main hatch open (メインハッチ開きます) <

人のよさそうな青年の声と、デバイス特有の無機質な声が帰ってきた直後、ヘリの後部が大きい機械音を立て、大口を開けるように開いていく。

ヘリの中の薄暗さが一転、外の光によって晴れていく。なんだかそれらが妙にまぶしく、自然と目を細める。

そんな光を背に高町が堂々とした姿で歩を進める、と高町は降下する前に俺達に向き直る。

「じゃあ、ちょっと行ってくるけど……みんなもズバツとやっつけちゃおう」

「「「「はい！」「」「」」

「は、はい!!」

なのは隊長としての凜とした声にルシエちゃんを除く全員が返事をする。

一人返事が遅れたルシエちゃんを見ると、あからさまに緊張したような面持ちで更にそれを悟られまいと必死に目付きを鋭くしていた。

なんというか……そこまで必死になられてしまうと緊張してることに逆に気づいて欲しいのかと思うくらいあからさまである。

まあ、まだ10歳ほどの子供なのだし仕方ないと言えば仕方ないのだろうが、どうにも頼りないというかそんなので大丈夫かと純粹に不安になる。

考えてみればこれはこの世界での俺の初陣にもなるわけで。年下だろうが何だろうがこの世界の先輩様を頼りにしているのだ。

「キャ口。……大丈夫」

そんなルシエちゃんを見逃すはずもなく、我らがエースオブエース様は優しい声をかけながら、ルシエちゃんに近づき、両の手をルシ

エちゃんの頬に当てる。

包まれた優しい腕の中で、ルシエちゃんはなののはの言葉を聞き、少しだけリラックスしたようだ。話が終わると、先ほどのようなあからさまな緊張感は無くなっていた。

「まあ、いざとなったら雄大君を盾にして逃げればいいしね」

「……なあ、今すっごく聞き捨てならない言葉が聞こえた気がするんですけど。もう一回聞いていい？ ……何を盾にするって？」

「雄大君」

「名字は？」

「高橋」

「完全なるパワハラじゃねえか!!」

なののはの容赦ない言葉にツッコム俺。ほんと、どんだけぞんざいなんだ俺の扱い。

「雄大君。私、雄大君が基本ツツコム側なのは知ってるし、それを踏まえてこういう話をしたのも認めるよ。だけど、パワハラは対象年齢が少し高いと思うんだ」

「誰がツツコム批評しろって言ったよ！ 別に俺はそれを生活手段にするつもりはないから！ 当たり障りない出来のツツコムで十分だから！！ てか、お前そんなキャラだったか！？ 会った時みたいな優しいお姉さんのようなキャラはどうした！！」

「えと……今度場を和ませたい時があったら、雄大君にこういう対応をしてみるといいってはやてちゃんが……」

「あの関西娘がああああ！！！！ 帰ったら奴の化けの皮剥がして、山の中に放り込んでやらああ！！！！」

「雄大さん。はやてちゃんが今減給決定だ、って言ってますです」

「あなた様は見目麗しい、足の先まで洗練された淑女です！ ですから、御慈悲を……御慈悲をおおお！！！！」

「……少しは緊張感持ちなさいよバカ」

最後のランスターの言うことはもっともで、何て言うか取り敢えず申し訳なかったです。

アホな会話も一段落し、なのはが空へ飛び立つてから数分。ヘリは目標のリニアレールの真上を平行に飛び始めた。ヘリの周りには航空型ガジェットの影響はなし。安全第一。うん、愛して止まない言葉である。

「よし、新人共。なのはさん達が空を抑えてくれたおかげで安全無事に降下ポイントに到着だ。準備はいいか!!」

「「「「はい!!」「」「」

この中で一番年長者であり、まだまだ若いフォワード陣を奮い立たせるためにグランセニックが声を張り上げる。

それに続くように俺を除くフォワード四名が耳が痛くなるくらいの

大声で返事をする。

まず、最初に降下するのはスターズ分隊の二人ランスターとナカジマ。

スターズ分隊というのはフォワード陣を二つに分けた分隊の一つである。

高町なのはを分隊長とし、八神ヴィータを副隊長としたスターズ分隊。

フェイト・Ｔ・ハラオウンを分隊長とし、八神シグナムを副隊長としたライトニング分隊。

スターズとライトニング二つ合わせてフォワード部隊というくりになる。因みに先のようにナカジマとランスターがスターズ、残ったモンディアル、ルシエちゃん、俺の三人がライトニングである。

今回の作戦はリニアレールの最後尾車両と最前車両にスターズとライトニングがそれぞれ分かれ、中央に向かって前進。道中車両内にいるガジェットを逃がさないように全機破壊し、前方から数えて七両目の重要貨物室に保管されているレリックを後方のスターズか前方のライトニング先にたどり着いた方が確保するというもの。

今回は隊長陣が空の対処に追われているため、実質俺たち若手（俺を除く・・・のか・？）フォワード五人だけでの作戦である。

さすが、エリート部隊初任務のレベルが半端なく高い。

「次、ライトニング！！ チビども気を付けてな」

「「はい！！」」

「俺はチビでもなんでもないんだが・・・それってツッコミ待ち？」

「ツッコム余裕があるなら、しっかりチビ達フォローしてやれよ」

「わあってますよ。少しはお兄ちゃんらしくかつこいいとこ見せてきますっての」

「帰ったら飯でも奢ってやる。必ず無事に帰ってこいよ」

「やめろ。それは死亡フラグってやつだ」

「知ってる」

「性質悪いわバカタレ」

いつものようにグランセニックと馬鹿なやり取りを終えて、ハッチの方に向き直る。

そこには緊張した面持ちのモンディアルとルシエちゃんがこちらをじっと見ている。

「というわけだ。お前たちは何も気にすることない。思いっきりやりたいようにやれ。俺が何があるのが守ってやる。お前たちの才能を存分に俺に見せてくれ」

「は、はい!!」

「それに．．．二人が怪我なんかしたら我らが隊長に半殺しにされかねないからな」

そういつて、自分でも分かるくらいに大げさに笑顔を見せる。すると、二人も微笑みを返し、今度はお互いが顔を見合わせて笑いあう。

うん。出勤前にはなかなかいい空気なんじゃないの？ いや、まあどれぐらいの緩め方がベストなのかは分からないけど、ガチガチだった二人の表情に少しは余裕がうかがえるようになっただけで十分だろう。

ルシエちゃんとモンディアルがハッチの前へ足を運ぶ。そして、ヘリの下に広がる景色を見ながら、モンディアルは力強く拳を握る。一方でルシエちゃんはやはり高い場所ともなるとさすがに怖いのか、一歩だけ身を引き、脅えた表情を見せる。その様子を俺は二人の横でじっと伺っていた。

「一緒に行こうか」

「……！ うん！！」

そんなルシエちゃんの様子に気づいたのか、モンディアルが脅えるルシエちゃんに手を差し伸べる。すると、ルシエちゃんは嬉しそうに返事をし、モンディアルの手を握った。

何というかねえ……一応俺もいること分かってんだろっか？ この二人は。大人になったら大変なバカップルになりそうな気がしてなんのだけど。

「ライトニング3 エリオ・モンディアル！」

「ライトニング4 キャロ・ル・ルシエとフリードリヒ！」

「行きます！！」

俺の二人の将来に対する懸念も口に出してない以上、二人の行動の歯止めになるはずもなく、二人は息のあった掛け声をかけ、勢いよくハッチを飛び出した。

「……………」

「どうした？ 二人が羨ましいのか？」

二人を無言で見送る俺をみて、グランセニックがそんな軽口を叩く。

「バカ言ってんじゃないよ。ただ……………」

「ただ？」

そう言って言葉を区切り、空を仰ぎ見る。空はこれでもかというほどに澄みきり、晴れやかだ。

「この空みたいいつまでも純粹であってほしいと思ったただだよ」

「汚れきつたお前には言われたくないわな」

「せめてカッコいいこと言った余韻に浸らせろや!」

とまあ、こんな捨て台詞を吐きながら俺はハッチから飛び降りた。

仰向けに重力に身を任せ、落下し続ける。晴れやかな青空のもと、俺は笑みを浮かべて呟く。

「……………よく分かってんじゃねえか。その通りだよ」

空中で身体を半回転させ、ヘリから目をそむけながら、俺は続ける。

「俺は……………汚れきつた存在だ」

自嘲気味なその独白には何の益もない。けれど、それは確かな真実。誰に聞かせるでもない、誰に知らせるでもない。

ひたすらに自分に言い聞かせるための言葉の無駄遣いだ。

それでも俺には必要なんだ。俺が俺であるというこの確認作業は。

自分自身を見失わないために。自分の立場を忘れないように。

「アルファ。行くぞ」

< Y e s , M y

l o a d <

「セット・アップ!!」

俺が叫ぶと、アルファの柄の先端の赤い宝石が光を放った。同時に俺の周りを黒い魔力が包み込む。

その魔力は俺の身体に蛇のごとくまとわりつき、徐々に衣服の形を成していく。

黒いインナーウェアに黒い長ズボン。全身黒の長袖長ズボンという出で立ちにそれとは対照的な真っ白なロングコートが魔力を帯びた防具として俺の身体に装着される。

これはこちらの世界での対魔法戦闘における防護服 - バリアジャケットと言っらしい。なんでも衣服自体が魔力によって構築され、魔力を含む攻撃からはもちろん物理的な衝撃も大いに軽減してくれるという、夢のような戦闘服らしい。

デザインはあらかじめ決められた訓練生用のデバイスを除いては、個人の意思が大きく反映されるため様々なものがあるとのこと。

そんな万能な衣服を身にまとい、俺は着地に備え、足裏に魔力を集中させリニアレールの上に降り立った。

「アルファ」

< 何でしょうか？ >

「お前の持ち主は一味も二味も違う外れ者だ。覚悟して使われるよ」

<存じております。遙か昔から>

「いい返事だ」

アルファを手に笑いながら、先に進んだ二人を追う形で走り出す。

先に降り立ったモンディアルとルシエちゃんは二人とも何の問題もなく戦えているらしい。進んでいく先には二人に破壊されたであろうガジェットの残骸が転がっている。

吹きつかれる風に逆らいながら、前へと歩を進めていくとすぐに二人の背中を確認した。アルファを抜き、右手に逆手に構えながら、大勢を低くしながら速度を上げる。

「はあああああ！！」

前で声を上げながらモンディアルが槍を振るい、カプセル型のガジェットを横に一閃する。

そのすぐ左にガジェットが現れ、モンディアルもすぐさまそれに反応し、デバイス――ストラーダでガジェットを斬り捨てようとする。

「お子様ばかりには活躍させませんよぉ!!」

しかし、残念。そのガジェットはモンドィアルに破壊される前に全速力で走ってきた俺の飛び蹴りに吹っ飛ばされていく。

「雄大さん!!」

「よぉ、遅ればせながらご登場だ」

うじゃうじゃと車両内から出てくるガジェットを尻目にモンドィアルの隣で笑う俺。

「んじゃあ、俺とモンドィアルで前衛担当な。ルシエちゃんは怪我しないように、補助魔法で援護頼むよ」

「はい、気を付けてください!」

ルシエちゃんの元気のいい声にまた笑みを浮かべながら、ガジェットの群れに目を向ける。

「よっしゃ。じゃあ、訓練の成果とやらを發揮させてもらおうとしま

すか」

そう言つて、アルファを構え直し、ガジェットの群れへと疾走する。少し後ろから同様にモンディアルもついてくる。

ガジェット達はそれを察知し、一斉に青い光線を放ってくる。それをフェイクを織り交ぜながら、右へ左へと回避しつつ前進していく。

「はっ！！」

ガジェットをすれ違いざまに一閃。元々、刀や剣のように斬る事に特化していないナイフはあまり対象を斬りつけるのには向いていない。

だからこそ、ガジェットに対してナイフの先端が垂直になる状態で決るように斬りつけたつもりだったのだが……

「うそぉ……、こんなに斬れるものだったけか？ ナイフって」

斬りつけたガジェットを見ると、深めの斬った跡が残ると思いきや、カプセル型の胴体が横から寸断されていたのである。

他人事のようだが、これをやったのが紛れもない自分自身なのだと確認すると、何故だかひどく現実感を感じられない。

<私はあなたの武器です。これぐらい出来なくてどうしますか>

「いや、さすがにそんな感情論じゃ、この切れ味は説明出来ないと思うんだけど。何か何も知らずに核ミサイルのスイッチを拾ってしまった。アメリカのコメディ映画の主人公の気分だわ」

そんな事を口にしながら、次は左から飛んできたガジェットの攻撃を跳んで避け、その勢いのままナイフを持っていない左手でガジェットの上部を掴み、体重を乗せ列車の外壁に叩きつける。

ベゴン！ という鈍い音が響き、ガジェットは動きを止める。そのまま、そのガジェットを踏み台にして前宙。回転の勢いで前方のガジェットにかかと落としを見舞いした。

「にしても、中々多いな。全部倒すにしても骨が折れるわ、これ」
そんな軽口を叩きながら、リニアレールから飛び出してくるガジェットを倒し、順調に前に進んでいく。

そして、俺達がリニアレールに降り立ってから約三十分後。
レリックが保管されている車両まであと一歩という時にソレは現れた。

<エンカウント!! 新型です!!>

デバイスを介して聞こえてくるフィニーノの声を聞きながら、俺達ライトニングのメンバーは足を止めていた。

俺達の視線の先にはガジェットが一体。しかし、そのガジェットは明らかに今までのものとは違っていた。

ガジェット? 型の四、五倍はありそうな巨体に、球状のフォルム。
中央には敵を視認するためだと思われる黄土色の小型カメラが三つ。

蛇腹の鋼鉄に覆われた二本の太いアームを、まるで手のように器用に操りリニアレールの上にその巨体を鎮座させていた。

「これはまた．．．．．なんか図体だけでかくて弱っちそうなのがでてきたな」

「ダメですよ雄大さん。見た目に騙されては」

「分かつてはいるんだけどなあ．．．．．もつとこう、せめてこの和んじまいそうな丸いフォルムから離れようとは思わなかったんだろうかこいつらの製造者は　　っ！」

俺が言い切る前にその大型ガジェットは太いアームを薙ぐように振り払う。

俺達三人は後方に跳び攻撃を避けると、着地と同時にルシエちゃんとモンディアルは魔方阵を展開し、俺は三角跳びの要領でガジェットに一直線に接近する。

足を止めることなく自分の中で魔力を循環させる。

「アルファ！！」

<Axel shooter>

瞬間、アルファを振るい黒い誘導弾を四つ射出する。

しかし、大型ガジェットは避けるそぶりも見せず、誘導弾を正面から受け止めようとする。

なんだアイツ．．．．．そんな性能よくないのか？

そんな俺の考えはすぐに裏切られる。

俺の誘導弾が大型ガジェットの目の前でまるで風船の空気が抜けるように消えたのだ。

「っち！！ まさかAMFか！」

俺の魔力弾を消したAMF。正式名称アンチ・マギリング・フィールド。これはガジェット全てに取り付けられている特殊武装なのだが、簡単に言えば魔力を無効化する特殊な空間を発生させるものである。

しかし、今までのガジェットならば十分にとおるレベルの威力を難なく打ち消したところを見ると……………

「図体だけじゃなく、威力も五倍ってことかよ!? レベルアップにも限度があるだろうが!」

再び距離を取り、アルファを構えなおす。すると、突然突き上げてくるような衝撃がリニアレールを襲う。

「って! 次から次へと……………今度は何だ!!」

半ばキレ気味に後ろに軽く目を向ける。そこにいたのは

「もう一体……………かよ」

目の前にいる大型ガジェットと同じタイプのものだった。

初任務（後書き）

ここまで読んで頂いてありがとうございます。

どうか、一言でも感想などよろしく願います。 辛口批評大歓迎です。

手掛かり（前書き）

投稿です。これからもこんぐらいのペースで投稿できたらいいなと思っ
ています^^

お気に入り数が増えて大変嬉しいです。これからもどうかよろしく
おねがいします。

手掛かり

状況は切迫していた。

レリックの保管車両を目の前にして、新型のガジェットに進路を塞がれ、そのガジェットをどうにかしようとした矢先に背後から同じタイプのガジェットの出現。

そりゃあ、焦るだろう。今俺は完璧に挟み打ちにあっている状態だ。この状況はあんまりというか、どれだけ大目に見てもよろしくないのは明らかだ。

それにあんまりもたついてもいられない。スターズの二人も予想以上に敵の数が多く、未だにレリックのもとにたどり着けていないのが現状だ。いくら機動六課フォワード陣が優秀な人材ぞろいとはいえ、こういう様に時間を稼がれてはレリックを先に確保されてしまうのは必至。

「とはいえ……………なあ……………」

と俺は不満げに口にする。

この状況を今すぐ何とかするというのは如何せん今現在の俺には無理なものがある。

知つての通り今の俺は機動六課のフォワード部隊の一員なわけであり、“魔導士”なのである。

”魔術”を行使していたころの事はこの世界に来てからはひた隠しにしている。よって、俺はこの世界では今まで一度も魔術を使つたことはない。

この世界に魔法というものがある以上、当然魔力という概念もあるわけで、それを根幹としている以上こちらに来てすぐの時はこちらでも魔術の行使は問題ないと思つていたのである。

しかし、この世界の魔法と魔術はあまりにもその仕組みが違いすぎたため、大事になるのを避けるために俺は魔術を使わないようにしたのだ。

まあ、何が言いたいのかと言えば、魔術 並びに俺が存分に”昔の俺”に戻ってもいい状況ならこの場を切り抜けるのは何の問題も

ないということだ。

自分で言っていてとてつもない気はしないが、俺は今までを通してそれだけの力を追い求め、努力し、そして手に入れた。

だからこそ、もし俺が昔のように戦えるならこのような任務は朝飯前なのだが……………

”もし”はあくまでも”もし”である。

この世界の俺は”魔法を使い始めて間もない魔導士”なのだ。俺は必要にならない限り、”魔術”というカードと”昔の力”というカードは使えない立場。

たとえ、危機的状況になったとしてもだ。その二つを使えるようになるのは本当に自分の命が危ない時かある一点におくのみ。まあ、そのある一点が何なのかは今置いておいて……………

長くなりはしたが、魔導士としての俺にとってはこの状況は大変ま

ずいというこゝである。

でもまあ、今までの話は裏を返せばその二つのカードを使わなくても何とかすることができるという意味でもあるのだけれども。

「雄大さん！ はあああああああ！！！」

モンディアルが俺の背後に位置する大型ガジェットに斬りかかる。それをガジェットは振り向きもせずその巨体で受け止める。

「つぐ！！ か、硬い……………」

しかし、モンディアルのストラダによる一撃はガジェットの堅牢な装甲によって決定的なダメージを与えられず、モンディアルは再び間合いを取る。

「フリード……………ブラストフレア！！！」

それと入れ替わるようにルシエちゃんの相棒の小竜が高熱の火の玉を吐き出す。

それを大型ガジェットは自身のアームをしならせ、弾き飛ばす。

「雄大さん！！ 後ろの新型は僕達二人でなんとかします！」

「前の一体をお願いできますか？」

モンディアルとルシエちゃんの力強い声が届く。

「そのセリフを待ってた！ 頼むぞ二人とも！！」

「「はい！！」」

そうだ、これが俺の望んでいた展開である。二対一の構図を何とかして一対一の構図にすること。

正確には一対一と二対一の構図であるが。出撃前に二人を守ると公言した手前、二人から離れることは極力したくはなかったのだが、この状況では仕方がない。こちらもいっぱいいっぱいなだから。

そんな俺の思惑を知ってか知らずか、二体目の大型タイプは俺に向けていたセンサーを百八十度回転させモンディアル達と対峙する。

「へえ．．．．．ガジェットつてのはただの厄介な鉄の塊かと思つてたが、なかなかどうして空気が読めるじゃないか。もしかしてそんな画期的な機能でもついてんのか？」

半笑いでそんな冗談を言ってみる。当然返答はなし。

「じゃあ、まあさっそく始めるとしますか。とつと終わらせて後ろの弟分と妹分を助けにいきたいんでねえ！！」

声を荒げ、ガジェットに突撃する。同時にこれでもかというくらい

に黒光りするアルファの刀身がガジェットから発せられた光線を切り裂いた。

その後の展開。ライトニング分隊のところに現れた新型二機が最後のガジェットだったらしく、レリックもスターズ分隊が無事に回収。リインフォース曹長がリニアレールのコントロールをハッキングで取戻し、初任務は被害者もこれといった失敗もなし、リニアレールの損壊というだけの初めてとは思えないくらいの成果で成功を収めた。

スターズ分隊の三人とリインフォース曹長はそのままレリックをク

ラナガン中央の研究施設まで運ぶためにヘリに乗り移動。

そして、俺達ライティング分隊は……………

「現場待機って何をやればいいんだよ。まったく……………」

「まあ、事態が収束したとはいえまだ何が起こるか予想はつかないからね。用心のためだよ。これだって重要な仕事だから、あんまり気を抜かないように」

「了解であります。隊長殿」

「ふざけない」

「いて……………」

この会話でなんとなく想像をしてもらえらるだろう。俺達ライトニングは最寄りの管理局員に事後処理を引き継ぐため、言葉の通り現場待機である。

待機のため基本的にやることなく、遠い空や眼下に広がる森を眺めながらフェイトに愚痴を言ったら軽くバルディッシュの柄で叩かれた。

<ミスター高橋。まだ任務中ですよ。そんなに気の抜けた態度で主人を困らせないでもらいたい>

「いやいやバルディッシュ。これはいわゆる軽いコミュニケーションンってやつだ。だからこそフェイトもそんなに怒っている訳ではないのだよ。むしろ、M気質のありそうなフェイトはどちらかというと喜んでいる可能性もある」

<!! それは本当ですか!! 主人!!>

「えっ！ いやいや、違うよ！ 確かにそんなに怒ってはいないけど……別に……」

「ほら見るバルディッシュ。俺の言うこともあながち間違いじゃないだろ？」

「ねえ、エリオくん。Mって何かな？」

「さあ？ 僕にもちよつと……」

とまあ、こんな会話もえらく久しぶりな気がするのは、それだけこの戦闘で消耗していたからだと言ったことが一息つく余裕が出来た今だからこそ感じ取れたからであろう。

ちびっ子二人がMの意味をフェイトに質問している様子を見ながら俺は心の中でそんなことを考え、同時に目の前で繰り広げられているこの光景をどこか微笑ましく、そして羨ましく感じていた。

俺も小さいころはあんな感じだったのだろうか？　その心の中で誰にとも取れず問いかける。けれど、その答えを返してくれるはずの両親はすでにこの世のどこにもいない。

もうアイツに殺されてしまった。あの嫌に空気が冷たかった曇天の日に。

失ってしまったかけがえのない人達。失ってから気づいたその尊さ。俺はたぶんまだまだ子供なのだろう。だからこそ、モンディアル達の掛け合いに微笑ましさだけでなく、羨ましい気持ちが芽生えたのだと思う。

けれど　　と、俺は視線を伏せる。感傷に浸る自分を押し殺すように目を深く閉じ、奥歯を噛みしめる。

俺は既に自らの道を選び、それに見合う犠牲や責任を幾度となく払ってきた。　　いや、責任なんていう軽い言葉で表してはいけない。

罪。それを俺は既にこの身に背負ってきている。本来、背負う必要のない重荷。それを敢えて背負ったのは、そうしてでも成し遂げた
い事があるから。他人から見れば俺のやることは本当にただの自己
満足なのだろう。間違いなのだろう。

けれど、俺はそれが正しいと思い、進んできてしまったのだ。人生
は後戻りのできない一本道。後に気づいたとしても、引き返すこと
は許されない。

だからこそ俺は……………

「雄大!!」

思考に耽っていた俺の耳に怒ったような、それでいてどこか心配そ
うな声が響く。顔を上げると目の前には眉をやや吊り上げたフェイ
トが明らかな不満を顔に出して俺を睨んでいた。

「さっきも言ったでしょ、まだ任務中だよ。気を抜かないで」

「ああ、うん。わりい……」

齒切れの悪い俺の返答に少し意外そうな顔をするフェイト。すると、途端に顔から怒気が抜け、不安な視線を俺に向けた。

「大丈夫？ 体調が悪いなら素直に言ってくれば……」

「怒った後にすぐ甘やかすと人は怒られたことを綺麗に忘れるんだ。びっしという時はいらん心配しないでよろしい」

そう言つて、フェイトの額を右手の人差し指で軽く突いてやる。いたつ、と突かれたところを擦りながらジトーツとした視線を投げかけるフェイトを知らんぷりしつつ、遠くの空に目を向ける。

「ん？ あれつて、引き継ぎに来た管理局員じゃねえか？」

すると、遠くの青い空に小さい黒い点が見えたのでフェイトの視線

から逃れるためにその点のある方角を指差す。

「おかしいな？ 応援を頼んだのはついさっきだからこんなに早く来るはずが……………」

ないのに、とおそらく続くはずだったフェイトの言葉は途中で途切れる。原因は突然の突風。全員が空の動く黒点を見た瞬間にその方向から不自然な突風が吹きつけてきたのだ。思わず俺は目を細め、まともに前を見ることが出来なくなってしまう。

「つく！！ 一体何が……………」

吹き付ける風の中、困惑気味なフェイトの声が聞こえる。いくら管理局執務官として突飛な状況に慣れている彼女とはいえ、こう微かな前触れも何もなければさすがに反応できなかったらしい。そして、その突風は吹き付けてきた時と同じように何の前触れもなく忽然と消えていった。

「何だよ一体……………つつ！？」

顔を上げ、息を飲む。そこには到底予測していなかった光景が広がっていた。

黒く長い長髪を顔の前に垂らし、もとは白かったであろう所々煤け、破れているワンピース姿。肌は病的なまでに白く、掴めばすぐに折れてしまいそんな華奢な体躯。

それは少女。その少女が腕をダランとさせ、俯いた状態で空に浮いていた。翼もなく、足場もないその空中でまるで空に吊るされたように力無く浮かんでいたのだ。

「……………あなたは一体誰ですか？　今の突風はあなたが？」

あっけにとられていたフェイトが視線を鋭くし、少女に問う。

「……………」

少女はそれに答えず、代わりに伏せていたその顔をゆっくりと上げ、初めて視線を俺達に向けた。

「つつ!？」

その瞬間、フェイト達が身をこわばらせた。途端に三人の呼吸が上がり、各々が自身の武器を強く握りしめる。俺も背筋に冷たいものが走り、アルファを取り出しいつでも戦闘に移れる準備をする。

少女の瞳は生物に感じられる生氣を感じさせないものだった。それと同時に彼女の身体から湧き出し始めた滔々とした殺氣。どこか無機質で伽藍洞なその殺氣に言葉を交わさずとも彼女が敵なのだとその場の全員が認識する。

「レリック……………ない」

彼女はここに来て始めて言葉を発する。おおよそ言葉とは思えないほどに淡々とし、感情が欠片も感じられない響きではあったが。

「レリック！？　あなたは何が目的で……………」

言いよどむフェイトを一目見て、少女はモンディアル、ルシエちゃん、そして俺へと視線をゆくり移していく。すると、少女が俺と目を合わせた瞬間に、その空の瞳を少しだけ大きく見開いた。しかし、すぐに無表情に戻ると俺を指差し、何の感慨もなくこう言った。

「ラストアンサー……………」

「っ！！」

それはこの世界の者ならば知るはずのない単語。さらに真つ当な人生を生きていれば耳にもするはずのない裏の世界の住人達が使っていた言葉。

瞬間によぎるのは、この世界に来てから感じ始めた異様な感覚。俺の生きる目的。それがこの世界にあると直感したあの感覚。

アイツと何か関係している

その瞬間に抑えていた憎しみが関をきつたように流れ出す。昔の自分が戻ってきたように彼女の殺気が心地よく、自分も彼女に対して自然と殺気を向け

笑う。

さっき言ってたことだが、俺が昔の自分を表に出す条件である”ある一点”の話だが。簡単なことである。

相手が魔術、もしくはアイツに関連しているということ。

「.....E u c h o r o (私は叫ぶ)」

その俺の変容ぶりを合図と取ったか、彼女は右手を俺達にかざし、詠唱を開始する。

その詠唱は間違いなく魔法ではなく、魔術を使う際のもの。いいだろう、早く来い。受けてやろうじゃないか。

そう心で呟いて俺はまた笑った。アルファを逆手に後ろに振りかぶり、久しぶりに魔術用に魔力をフル回転させる。

「Manifestatie（顕現）」

この世界に来て始めて唱える魔術の祝詞。冷静に考えれば、俺が魔術を使うことで後々面倒な気がするのだが、まあ考えたって仕方がない。久々にスイッチが入ったんだ。ここまで来て止められるかよ。

さあ、見せてやるぜ。可愛い可愛いお嬢さん。

「.....Fogo（炎）」

「Sterrende zwarte（黒の星）！！」

殺戮技巧の境地の俺の力ってやつを。
ラストアンサー

手掛かり（後書き）

どうでしたでしょうか？

ご感想お待ちしています。辛口でびしつと言ってくれる人大歓迎です。もちろん、面白かったの一言がもらえた日には嬉しさのあまり三日寝込みます^^

進展（前書き）

新しい小説を公開したので少し遅くなりました。

これからはそちらと交互に更新していきますので、だいたいこれぐらいの分量で一週間に一回ぐらいは更新を目標に頑張っていきます。感想を貰えると、作者の励みになります。どうか、よろしくお願いします。

進展

私 フェイト・F・テストロッサは目の前の光景に困惑を隠せなかった。

目の前には長い黒髪をなびかせ、こちらに手をかざす白くて今にも壊れそうな少女。そして、その少女からあふれ出す何とも言えない威圧感。

本局執務官として、犯罪者相手に危ない戦いを切り抜けてきたからこそ分かるこの少女の異質さ。彼女からあふれ出すのは殺気。それもあんな年端もいかない少女が出すようなものとは到底考えられない、間違いなく本当に危険な類のもの。

私は特に武道を嗜んでいたわけでもないし、そういう気配を察知するようなことに敏感なわけでもない。でも、管理局員として戦いの場を経験してきた感覚としてあの少女の危険度は理解できる。

あれは関わってはいけないものだ。関われば最後自分の身が安全な保障などどこにもない。彼女は平気で人を殺し、それに対して何の

感情も抱かないような生粋の化け物。

そんなものが目の前にいる。私の身体が自然とこわばり、突然氷水を浴びせられたように全身に鳥肌が立った。

「・・・・・・・・F o g o（炎）」

私のその恐怖を裏打ちするように彼女は相変わらずの無表情で呟く。その瞬間、彼女がかざした手から真つ青の炎が蛇のようにうねり飛び出した。

<・・・・・・・・！ P r o t e c t i o n p o w e r e d！！>

バルデイツシュが咄嗟の判断でバリアを貼る。我に振り返撃に備えようと足腰に力を入れた瞬間・・・・・・・・

「Sterren de zwarte（黒の星）！！」

聞き覚えのある声と共に大きな黒い球体が青い炎を横から吹き飛ばした。

慌ててその球体が飛んできた方向を見る。そこにはよく知る人物。つい一月と少し前に次元漂流者として異世界から来た青年。いつもふざけてばかりいるけど、どこか憎めないような、そんな彼が見たこともない顔をして佇んでいた。

纏う雰囲気はいつもの柔らかいものではなく、まるで全身を武器で固めたような自分以外の全てを拒絶するもの。瞳孔はこれでもかと言わんばかりに開き切り、その瞳の輝きはまるで獣のように爛々と生々しい光を放っている。

口元は歪に歪み、吊り上がる。……あの表情は一体何なの

か？ いや、表現できないわけではない。しかし、あの表情をこの言葉で表していいのだろうか？ そう思えるほどに彼の表情は常軌を逸していた。

どうして、どうしてあなたはそんな顔で笑っているの？

「……………ご挨拶だなあ、お嬢さん。いきなりの事で未だに混乱が続いてると判断して、すぐさま攻撃に移行するそのしたたかさには惚れ惚れするよ」

雄大が口を開く。とても楽しそうに、とても面白そうに。

「それにしても……………俺が言えた義理じゃないんだが、そんなに殺気全開でこちらに向かってくるのは君としてはどうなんだ？ まあ、そっちの都合不都合なんざ俺にはこれっぽちも興味はないんだが……………」

「……………お喋り」

少女は雄大の問いに答えと取れない答えを返し、両手を大きく真横に広げる。

「.....Eu choro.Fogo de chuva
(私は叫ぶ。炎の雨)」

少女が呟くと、広げた両手が青い炎に包まれ、そこから私たちに向かって炎の雨が降り注ぐ。

「エリオ、キャロフ.....!」

咄嗟に後ろを振り返る。そうだ、なぜ考え付かなかったのだろう。まだまだ未熟だけれどそれなりに経験を積んできた私がこんな状態だったんだ。まだ、経験も乏しい　ましてや子供の二人にはこの状況は

案の定、二人は少女を見上げ肩を震わせていた。立ち尽くしたままデバイスも構えず、自分たちに迫ってくる炎を信じられないような

顔で見上げている。

「……………間に合って！」

<S o n i c m o v e !>

得意の高速移動。必死に手を伸ばし、二人を引き寄せる。二人の体温を身を感じながら防御魔法を展開しようとする。しかし

間に合わない
！

炎は既に目と鼻の先に迫っていた。これでは、自分だけならともかく三人同時には守りきれない。私は咄嗟に二人を抱え込む。この二人だけは、この身に変えても……………

「V e r d r i j v e n（解呪）」

雄大の声が聞こえると同時に目を閉じる。次の瞬間には来るはずだった衝撃がいつまで待っても来なかった。不思議に思い、目をゆつくりと開くとあれだけ無数に降り注いでいた炎がたちどころに消えていた。

「・・・・・・・・お喋りは嘔吐き。だから・・・・・・・・」

少女の言葉に少し怒気が混ざる。そして、言葉を切り軽く息を吸うと

「・・・・・・・・きらい」

次の瞬間には雄大の後ろで炎に包まれた右手を振り上げていた。

それを雄大は振り向きざまにデバイスで受け止める。そのまま強引に力で振り払い、彼女の首に一閃。彼女はそれをしゃがみ込んで避

け、右手と同じように炎に包まれた左手を雄大の胴に振るう。

雄大はそれも避け、お返しとばかりに武器を振るう。そこからは目まぐるしい応酬が続く。二人はそれぞれの攻撃を紙一重のところで避け、避けた動作に連動するような淀みのない動きで相手に攻撃を行う。

「ははは、中々やるじゃないかお嬢さん。君の年齢じゃ考えられない動きだ」

「・・・・・・・・お嬢さんじゃない。・・・・・・・・フロリス」

「フロリス・・・・・・・・それがお前の名前か。それじゃあ、名乗ってくれた事に敬意を表して・・・・・・・・」

「っ!？」

応酬に変化が訪れる。今や両腕だけではなく、四肢に炎を纏わせた少女の蹴りをあろうつことか雄大が素手で掴む。

「そろそろ真面目に相手してやる」

そのまま少女の身体を持ち上げ、身体を半回転させた遠心力で少女をリニアレールの上から崖下に放り投げた。

抵抗できずに落ちていく少女。それを見下ろしながら雄大は微かに微笑んだ。

「フェイト、今のうちに応援を要請しとけ。さすがに人数が増えると同僚もやりづらくなるはずだし」

そう言って、雄大は崖に向かっていく。どうやら飛び降りて少女の後を追うつもりらしい。

「ちょっと待つて！　　いつたい今の子は．．．．．それにその力は．．．．．」

「まあ、突然のことに色々と戸惑いはあるだろうけどさ、取り敢えず詳しいことは後。今はあのガキをどうにかしてくるから。フェイトは二人を頼むな」

「ま、まちなさ」

雄大は一方的に言いたいことだけを言うと、私の返事も聞かずに崖から飛び降りた。慌てて崖の下を覗き込むと、空中に無数に現れた黒い箱を足場にしながら下に降りていく雄大の姿があった。

――――

炎を扱う少女を追いかけて、眼下に広がる森を目指す。顔に吹き付けてくる逆風が冷たく、高ぶっていた感情を幾分か冷ましてくれる。

森に降り立ち、周りを見渡すと少女は意外にも直ぐ見つかった。真

面目なことに落とされたであろう場所で、俺が来るのを待っていたようだ。全く踏み均されていない茂みの中で無言で俺を見つめている。

「さて、本気で相手すると言った手前で悪いんだが……お前に二三聞きたいことがある」

その言葉に少女は何の反応も示さない。先と同じようにただこちらを見つめたままその場でじっとしている。

「まず一つ……それは魔術か？」

その言葉に少女は黙ってコクンと頷いた。

「……私は喰らう者。オルイター……師はいない」

「その挨拶……そうか、確かに俺達の世界の魔術師でなければその挨拶の形式はわかりっこないよな」

少女が口にしたのは、魔術師同士の礼儀みたいな物。わざわざそれを実演して見せてくれた辺り何かと気づかいの出来る子なのかもしれない。

俺達の世界の魔術師は、戦いの前や改まった場所での挨拶の場では自身の二つ名と、魔術の師を相手に伝える風習がある。

自身の二つ名を教えるのは自分の存在の証明。さらに自分がそれなりの使い手であることを相手に知らしめる意味がある。

二つ名は自身で名づける事は禁止されており、自身の魔術の師が弟子を一人前と認めた証につけたり、実力のある魔術師は自分の行う行動によって周囲の者達から呼ばれるようになった名前などが二つ名となる。

後者はもちろん、どちらもそれ相応の実力がなければならぬために二つ名はその人物の強さの指標といっても間違いではない。

そして、師を教えるのは自身の周囲の力を知らしめるためである。

高名な魔術師は、当然と言えば当然だがあまり弟子を取らない事が多い。

基本的に自身の力を突き詰める事が魔術師の目的であり、その力で他の魔術師を凌駕することが常だからこそ、高名な魔術師は自身の手の内をあまり広めたくない。

それを踏まえた上で高名な魔術師を師に持つということの重大さを考えれば、もう俺の言いたいことは自ずと分かって貰えると思う。

基本、弟子を取らない人が弟子を取る。それはその弟子たる人物が相当の才能を持っているか、かなりの信頼をおかれているということに他ならない。

理由は何にせよ、その魔術師の弟子であるだけで一目置かれる存在になる訳である。

とまあ、これが俺の世界の魔術師の礼儀な訳だが

「師がない？ 君のそれは独学と言うことか？」

その俺の疑問に彼女は次は首を横に振る。

「……御主人さまが本をくれた。……それで勉強した」

「そうか、いや君が読書する姿はさぞ絵になるんだろうな。さながら、入院中の病弱な少女……って感じか？」

そう言つて、心から沸き上がる笑みを隠すことなく顔に出す。

「なら、二つ目の質問だ。君はどうやってこの世界に来た」

「……私はずっとこの世界にいるよ?」

俺の問いに彼女はそんな答えを小首を傾げながら返してくる。

「……帰る所がなかった私を御主人さまが助けてくれた。……御主人さまは嘔吐かない。……他の人とは……違う」

続けて彼女は、語尾を少々強めながらそう言った。

何とも矛盾する話だ。彼女は何故、この世界にずっといたと言っているにも関わらず、俺の世界　つまり異世界の道理を理解しているのか。

考えられるのは彼女の御主人さまの事。その御主人さまとやらが、この世界出身の彼女に魔術の知識を与え、魔術を会得させた。

そう考えれば、筋が通る。そして、俺が考える限りでこの世界にいる可能性のある魔術師はただ一人。

「最後の質問。……お前の御主人さまの名前は？」

「……………」

訪れる沈黙。少女は名前を言うか言わないか悩み、小首を傾げている。しかし、どうやら固く口止めされていることもないらしく、決意したのか首を戻し、こう答えた。

「……………オブジェ……………オブジェ・フラジイル」

それは待ち望んでいたヤツの名前。俺が今までの半生をかけて追いつけた俺の生きる目的。

直感はしていた。だが、確証はなかった。けれど、今その確証を得た。

その事実に関が綻ぶ。どうしようもなく、止めようもなく、俺の顔

は狂喜に歪んでいく。

胸に溢れるこの憎悪。 脳髓を駆け巡るこの殺意。

この世界での魔術の秘匿の事などとうに忘れてしまった。 あるのは、
ヤツの手掛かりを見つけた事だけ。

やった。

そう呟いた俺の身体は無意識のうちに少女を襲わんと飛び出していた。 久しぶりのこの感覚。 何と楽しい事だろう。

進展（後書き）

今更ですが、お気に入り登録してくださっている方々ありがとうございます。

まだまだ、拙い作品ですが完結目指して地道に頑張って参りますのでよろしく願います。

狂気（前書き）

少し遅くなってしまいました。

どうぞお楽しみ下さい。

狂気

踊る身体。跳ねる心。狂喜と狂気が俺を満たす。この様子を見れば、機動六課のメンバーは目を疑うだろう。俺のこんな姿は誰も見た事がないし、何時もの俺からは到底想像できない豹変ぶりだろうから。

けれど、これが本来の俺の姿なのだ。両親の復讐のためにある一定方向の力だけを手に入れ続け、使ってきた成れの果て。

多くの血と肉と屍の上に産み出された、一つの可能性。^{アンサー}それが俺。
高橋雄大そのものだ。

飛び掛かる俺を見て、少女――フロリスは怯むことなく、その場で両手を前に構えて俺を迎え撃とうと腰を落とす。

重力に身を任せて落ちていく身体と共に重みを乗せた斬撃を彼女の頭に振り下ろす。

彼女はそれを見切り、半歩だけその場から下がった。刃はフロリスの顔の前を掠めるように通りすぎ、俺の着地で生じる隙を見逃さずフロリスはしゃがみ込む形で着地した俺の頭を薙ぐように蹴りを繰り出す。

それを手で掴み、止める。そして、そのまま掴んだ足を引き、体勢を崩そうと力を入れた瞬間。

「ーーーーっ！」

フロリスの足が燃えた。

青い炎が彼女の足を芯にして、突然燃え上がったのだ。

その温度にたまらず手を離し、後ろへ二、三步後退する。

「……知ってる？ ……炎って青い方が熱いんだよ」

彼女は相変わらずの抑揚のない声でそう言うと、四肢に炎を灯らせる。そのまま地面を蹴り、一気に俺との間合いを詰めてきた。

「ふっ……！」

「はははっ」

間合いが詰まるや否や躊躇いもなく拳を、足を急所に目掛け振り抜いてくる。それを時には避け、時にはいなし、時には迎え撃ちやり過ごす。

しかし、それは彼女の計算の内だった。

「……くっ！」

何度目かも分からない攻撃の応酬。そんな中フロリスの右の拳を紙一重で避ける。

しかし、彼女の拳に纏わりつく青い炎が俺の頬を焦がしていった。先ほどからこればかりである。彼女の攻撃をまともには受けていないのに、付随した炎の熱で身体のうちこちに火傷の痕ができていく。

そんなじり貧の状態を抜け出そうと、大きく間合いを開けようと動くのだが、フロリスはそれを許さないように直ぐに間合いを詰めてくるため結局元のじり貧状態に陥るのだ。

「やれやれ、年相応に実直な戦い方ならまだ可愛げもあるだろうに……いやにねちっこいやり方をするもんだ」

「……私は喰らう者。……えもの餌を確実に仕留める為にはこの方が効率がいい」

「俺が言ってるのはそういう事じゃないんだが……まあいいか」

そんな軽口を叩いている間もフロリスは炎を躍らせる。その炎にじわじわと体力は削られ、吸う空気までもが彼女の炎のおかげで熱を帯び、俺の肺すらも痛めつけていく。

「……………なんで攻撃しないの？」

「そう思っならそのやんちゃな手足を止めて欲しいんだけどね」

「……………それはできない」

「ああ、君はそうじゃなければ嘘だ。お嬢さん。そんな我慢できないお嬢さんのために、何故俺が攻撃しないか教えてやろう」

俺の言葉に怪訝な顔をしながらもフロリスは攻撃を続ける。しかし、その攻撃はすぐに止まることとなる。

「……………」
えっ？」

それは無表情の彼女から感じ取れたはつきりとした驚き。まるで死人のように固まって動かなかった彼女の顔が解れ、元来整った目元が大きく見開かれていた。

「なんだそんな顔もできるんじゃないか。その方がよっぽど年相応だと思うけどね」

彼女の驚きを余所に俺は至って平然と答えた。

彼女のその手を掴みながら。

「…………燃えてるのに、なんでそんな……………」

「俺はな嬉しいんだ……………」

掴んだ右手が熱で焼けただれていくのが感じられる。徐々に感覚が無くなるのを感じながら俺は構わず言葉を紡ぐ。

「この世界に来て、ようやく目的に近付けた事とは別に俺は君に会えた事が嬉しいんだ。
俺を全力で殺しに来てくれた存在に出会えたことが!!」

声を荒げ、左手に持つアルファの柄を思い切り彼女のこめかみに打ち当てる。

「……………う……………あっ!!」

たまらず頭を抱えてよろめくフロリス。その隙を見過ごすことなく、ふらふらと離れていく彼女を逃すまいとワンピースを無造作に掴み、こちらに引き寄せる。

バランスを崩したのを見計らい、服をつかんだままフロリスの足を払い、乱暴に地面に馬乗りになって押し倒した。

「……………つく！ E u c h っ！！」

「させるかよ」

フロリスが詠唱を開始したのを見て、アルファを彼女の口の中に突っ込んだ。フロリスは口を開いたまま俺をじっと睨みつけた。

「この世界に来てからさあ……………俺の周りは結構味気なかったんだよ。そりゃ、訓練校でもそれなりに強い奴はいたし、六課の戦闘員はかなり強い。けどなあ、みんなこぞって死を知らない。本当の殺し合いを知らない。本気で殺しに来る奴なんていなかった」

詠唱なしに魔術は使えない。それにこの体勢だ。俺と彼女では体格差がありすぎて、彼女は身動き一つとることができない。

そんな状態の彼女をいいことに俺は自身の思いを告白する。

「だから、嬉しいんだ。久しぶりにこんな殺気にまみれた殺し合いが出来て。血沸き、肉躍るとはこのことかな？」

そう言つて、フロリスと顔を近づける。その顔には先ほどの無表情からは一変、戸惑いと恐怖が浮かんでいた。

彼女は今こう思っているに違いない。

こいつは狂ってる。

自分が死ぬかも知れない状況で笑っているなど、正気の沙汰とは思えない。ただ、他の生命をいたぶる事で快楽を得る性格ならまだいい。それは飽くまで個人の趣向であるし、サイコパスという心理の専門用語でも表現されるくらいなのだから、理解はし難いが、及ばない事はない。

けれど、それとは違い自分が死ぬ事にすら快楽を求めている。その

一点がヒトとして生きている限り疑問を持たざるを得ない。

なぜなら、ヒトは誰もが平等に死を恐れているから。

自身の視界が無くなり、思考が途切れ、自分という一つの存在が認識できなくなることから恐れるからだ。

そして．．．．．彼女もまたヒトだったのだ。

どんなに年不相応な考えを持っていても、いくら力があるうと、どれだけ心が抜け殻になろうとも。

一度ヒトとして生まれた以上は永遠にヒトなのだ。

だからこそ彼女には俺が理解できない。ヒトでありながら、ヒトから外れた心を持つ俺の考えが。

「ああ、無理に理解してくれようとしないで結構だ。俺だって、君の立場にいたら訳が分からなくなるだろうしね。だから、君に会えて嬉しいんだってことだけ覚えという貰えればいいよ」

俺の言葉にフロリスは眼光を鋭く俺を見据える。身動き一つ出来ない彼女なりの精一杯の抵抗なのだろう。それを見ながら俺は無意識に頬を吊り上げていた。

「本当なら君とまだまだ殺し合いを楽しんだ上で、君の一部一部が映えるようにバラバラに刻んでやりたかったんだが．．．．．」

そう言つて俺はアルファをゆっくりと彼女の口から引きずり出し、軽く横に一振りして唾液を払う。

「君には聞きたいことが山ほどあるからなあ。残念だけど今回はお預けだ」

それに　と、言葉を切り空を見上げる。

「そろそろ時間だ。俺はまだ管理局に齒向かうような事はしたくないんでね」

「……まだ？」

「そう、まだね」

悔しそうに歯軋りし、身体力を抜くフロリス。同時に空には六課のヘリがこちらに向かってるのが見える。

さて、どう言い訳をしたものか。魔術についても、この焼けただれた右腕についても。

狂気（後書き）

無理やり終わらせた感が否めない。もっと、文才が欲しいです（泣）

やっぱりプロットをしっかり立てないですね、今のままじゃ穴だらけな物語全開です（汗）

作品に対しての感想、ご意見は何時でもお待ちしております。辛口な評価もどしどしです。どうかよろしくお願いします。

次へ（前書き）

これからほんぐらいの量で更新していけるようにしたいと思います。

それではどうぞ。

次へ

突然だが皆さん。修羅場というものをご存じだろうか？

修羅 仏教における六道、死んだ後に生命が辿るとされる六つの道の一つにも名を連ねるあの修羅である。

意味合い的には戦いの神 阿修羅からとられた言葉であるため”
争い”を表す言葉、修羅。

それを正しく理解するならば争いの場 これが修羅場の本来の意味である。

しかし、今日においてあんまりこの言葉を正しい意味で使うことは少ない。

そういう場は大抵”戦場”とか他の言葉で表される事が今では一般的である。

そして、修羅場と聞いた時に多くの人が真っ先に思いつく状況は実際では”一人の人物が多く的人物に責められる状況”の事が多い。

簡単に言えばフルボッコである。その手段が肉体的なのか精神的なのかはともかく、フルツボコ寸前な状況な訳である。

ビフォーアフルボッコ、インフロントオブフルツボコである。

まあ、ここまでつらつらと前ふりをしておけば何となく俺の今の状況を想像して頂けると信じた上でこんな語りから入った訳であるが
．．．．．

つまり、今の状況を掻い摘んで話すと

「．．．．．さてと、私らに何か話さなあかん事あるんちゃう？ 高橋二等陸士」

「まさか、ここまでの状況になっておいてしらを切るつもりなんてないよね？」

「えと．．．．．なのは、はやて。もうちょっと落ち着いて．．．
．．．」

「・・・・・・・・・・何、この修羅場？」

そう修羅場です。思わずそう呟きなくなるぐらいの修羅場です。

まあ、少し状況を説明するとあの後フェイトが応援を呼び、それに
応えるように現場にトンボ返りしてきたスターズ分隊の乗るヘリが
俺とあの病弱そうな少女　フロリスを発見し、フロリスを拘束し
た状態で六課に帰還。

フロリスを六課の取調室に待機させ、取り敢えず処遇や聴取などは
後回し、晴れて最初の任務は無事終了となりフォワード部隊は各自
休息を取るべく解散となった　　はずだったのだが・・・・

やはりというか、当然というか、俺の戦闘映像がライトニングのメ
ンバーのデバイスに記録されており、それがやれ見たことない魔法
だとか、やれ有り得ない現象だとか物議を醸し、俺だけ部隊長室に
緊急召集。

有無を言わせないオーラを纏ったはやてとなのは。対照的にその雰
囲気に怯えつつもすっかり出口と俺の対角線上に立ち、逃げ道を塞
いでいるフェイト。

そんな三人に囲まれ、なすすべなく床に正座させられている俺。

四面楚歌、八方ふさがりな今の状況に至る訳である。

「…………いや、正確には三面楚歌、三方ふさがりの状況だな」

「残念。リンも含めて四面楚歌、四方ふさがりが正解や」

「そんな小っさすぎる壁があつてたまるか!!」

「失礼です！ 乙女に恥をかかせた罪として、洗いざらい話すことを誓うです!!」

「なんだその理屈も糞もない誓いは!!」

「乙女の心は繊細なんだよ雄大君」

「何でもかんでも乙女って言えば済まされると思っな!!」

「何かすごく久しぶりに雄大のツッコミを聞いた気がするよ」

とまあ、フェイトがそんなことを言って一旦部屋の中が静まりかえる。

実際はフェイト以外の三人が俺をものすごい剣幕で凝視しているだけなのだが。

「……………はあ」

そんな中、はやてが馬鹿馬鹿しくなったのか呆れたようなため息について目を閉じ、顔を少し伏せる。

心なしかその行動で場の雰囲気が少し和らいだ気がした。

そのため息が呆れ混じりなのが何とも複雑な気分ではあるのだが。

「まあ、訓練校の事然り、こっちに来た時の様子然り、薄々ただもんじゃないとは感じ取ったけど今回でそれがはつきりしたわけや」

はやてはそう言って再び俺を見据えた。その瞳は先ほどまでのどこかおどけた雰囲気のものではない。

言うなればそれは上に立つ者の眼だ。私情を挟むことなく、ただ今後この六課をどれだけ淀みなく動かす事が出来るかを考え、そのために必要な事を躊躇なく収集しようとする冷徹な眼。

まるで明日を生きるために獲物を狙う狩人の眼だ。そこに先ほどまでの馬鹿らしいやり取りを楽しんでいた少女の面影はない。

今の彼女はどこまでも冷静でどこまでも冷徹だった。

「．．．．．それだけで俺を特別だと考えるのは少し早計だと思うんだが、そこんとこどう思うよ？ 部隊長殿」

「悪いんやけどこっからはちゃんとしたお仕事の話や。個人的にその口車を逆に乗り回したいのは山々なんやけど．．．．．私にも立場がある」

「残念。フラれたか．．．．．」

「雄大君が正直に喋ってくれてたら、埋め合わせはいつかしたるで堪忍な」

微笑みながら彼女はそんなことを言う。時々出てくるこの彼女の素
が八神はやてという少女の魅力なのだろう。

人はギャップに弱いとよく言われる。これは聞こえはいいが冷静に
考えてみれば、人は不意打ちに弱いという当たり前の真実を言い換
えただけの話である。

しかし、言葉が違うならその表す意味も微妙に違ってくるのである。
この場合は前述が受け手が良いイメージを持った時ないし良い出来
事が起こった時、後述は受け手が悪いイメージを持った時ないし悪
い出来事が起こった時。

彼女はそんな良いイメージを意図せず他人に持たせる力がある。そ
れはもちろん彼女が計算してしていることではないのだろう。

ただ、彼女のそのギャップはいわば今の俺の立場のようなものと
っては毒である。

後ろめたい、隠したい事がある人間には少なからず罪悪感がある。
彼女の優しさ（それ）はその人の罪悪感を刺激するのだ。

この人はこんなに優しくしてくれているのに俺はそれに報いていな
い、この優しさに報いるためには

気づけば自分が言っまいと心に留めておいた事を垂れ流しである。

彼女の魅力は見方を変えれば、この上ない毒なのだ。特に真つ当な道から外れたものにとっては劇薬だ。

それを無意識下で行っているはやてに一抹の恐怖すら覚えるが、それも若くしてこのようなエリート職に就けた才能なのだろう。

「じゃあ、回りくどいのは嫌いやで単刀直入に聞くで。雄大君のあの力はなんや？」

そんな俺の思考をよそにはやては俺をまっすぐ見据えたままそれこそ直球の質問をぶつけてくる。

「あらかじめ単刀直入に聞くと云ったのはちゃんと聞いていたけどさ、それはいくらなんでもズバツと聞きすぎじゃない？」

「些細な事で議論する気はないんや、出来るならはよお答えてほしいんやけどな」

「まあ、一旦落ち着けて。女性をもつと淑やかであるべきだろ?」

「あいにく育ちがわるいもんでなあ」

「そんなことを言いたいわけじゃないんだが……まあいつか」

そう言つて俺はその場から立ち上がり、そのまま背を向けていた玄関の方に顔だけを向ける。

「どうせなら場所を変えよう。聞き耳を立てているお客さんがたくさんいるようだ」

そう言つて俺は扉と平行に指で宙をなぞる。すると、その指の動きと連動するように扉が開き

「」「」「うわっ!……!」「」「」

四人の男女が雪崩れるように部屋に転がり込んできた。

「ティアナ、スバル!!」

「エリオに…….キャロまで」

なのはとフェイトが驚いて四人の名を呼んだ。そこにいたのはフォードの四人。

四人は気まずそうな顔をしながら、力無く笑い俺達を見まわしていた。

その様子を見ながらはやてはまたもため息。頭を抱えるようにして口を開いた。

「で? どこに移動するん?」

次へ（後書き）

ゴールデンウィークに更新したのでとても時間に余裕がありますね
^^

取り敢えず早めにストーリーを展開させていきたいです。完結まで
何とか後一年ぐらいで持っていきたい（汗）

感想、ご意見いつでもお待ちしています。もっともっと、勉強しな
いとなあ……………

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0974o/>

魔法少女リリカルなのはStrikers-仮面の復讐者-(復刻版)

2011年10月7日16時12分発行